

特11

609

演劇脚本

天満宮菜種御供

全壹册

版權所有
興行權

088684-000-8

特11-609

天満宮菜種御供

並木 五瓶/著

M28

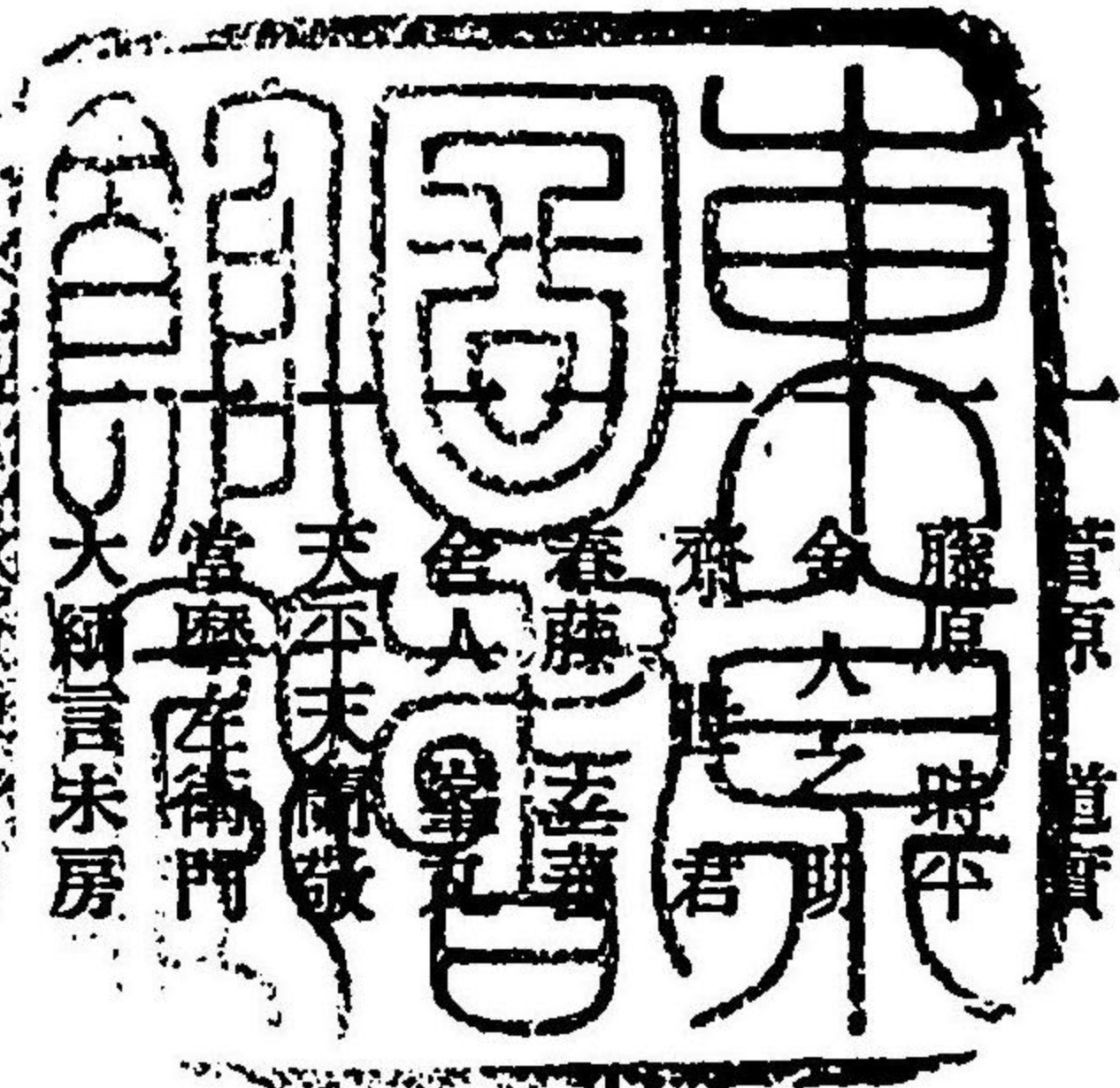
DBJ-0343



特11
609

天満宮菜種御供

大序 洛西嵐山花見の場
岩倉谷當昌院の場



菅原 道實
藤原 時平
金 大之助
藤 君
春藤 運
春人 運
天 平 夫 敬
菅原 左衛門
大綱言末房
左中辨希世
仕丁柘榴丸
實は荒島主税

紅梅姫
十六夜
娘松月
娘彌生
同卯月
同陸月
同勝野
官女松の局
同竹の局
同梅の局
同櫻の局
一 娘 大勢



- 一 舍人又九郎
- 一 判官代輝國
- 一 左大辨時晴
- 一 三好 清貫
- 一 宰相 房則
- 一 伴ノ 道仲
- 一 物川 宰相
- 一 仕丁 谷丸
- 一 中將 政道
- 一 同 元家
- 一 同 春行
- 一 辨ノ 中將
- 一 久納 軍八
- 一 仕丁大勢
- 一 官人大勢
- 一 寺子三十人
- 一 侍 六人
- 一 乳母
- 一 隨身

造り物一面嵐山花盛りの躰櫻の釣枝毛氈を掛し床几を置三絃入神樂にて幕開くと向ふより道仲時晴公家形り房則春行繼上下跡より素袍の官人二人鞠を箱に入持出る(道)今日は長閑にて櫻見の催し(時)齋世の君御遊覽の御供(房)家來に持せしアノ鞠をお慰に(道)然ば是に

て中將殿(時)其許柄(道)御一所にト兩人鞠を蹴るおかしみから兩人どつさりと成(皆)ハ、(時道)余りはづみ過升た(時)何は然れ各々へ申談る義も有ば御幕の内(道)何れも(皆)先々ト唄に成皆々遣入臺拍子に成向ふより紅梅姫かつぎ形り跡より秘彌生卯月陸月勝の附て出る(勝)お姫様春は長閑に櫻の盛り(彌)無理に願ふて(皆)今日の御供(姫)外珍敷歩行詣本に見事に盛りじやわいな(勝)アノ幕の内が齋世様の御しつらいと見得升る(彌)臨時御休足を(姫)皆もおじや、皆々本舞臺へ來り此内立番古びたる浪人形り頬冠りにて立塞り一人づゝ突退行住于臺丸さゝるるを立番は姫の袖を控る(峯)狼藉者すさりおろふ(立)何卒手の内を願升(峯)袖乞敷(勝)夫な事ならト懐中より帛紗包の金を出し○夫遣ふト遣る(立)是は何じや此様な(立)馬鹿盡すなト投る(彌)袖乞が金を嫌ふて能物かいナ(峯)替た浪人殿何がほし(立)己がほしいのは情がほしい(峯)何と(立)お姫様の色能返事お聞せ被成て被下升(立)應外な奴めむさい姿で穢わ敷(勝)あなたをどなたと思やる(立)イヤ菅原家の姫君(立)能何ての此願い(峯)何と(立)色能返事聞せて被下升ト頬冠りを取る女形皆々胸り思入(立)前は(峯)春藤立番様(勝)立番様が何故に(立)此立番が仲立して度々送る時平公の詔書戀を叶へん爲サ姫君色能返事をお聞せ被成て被下升(峯)時平公の戀を叶へん爲(姫)親上母上のお赦しも無に御返事は(立)スリヤお嫌被成のか(勝)申立番様時平公は當世の美男何のお嫌被成升ふ(立)今飛鳥も落る時平公の御威勢館へ連て歸て御執持(峯)

詞が過る立蕃殿其元は武官權威を持て得心はさせ升ぬぞ(立)而白い大納言でも武官でも戀に位は入らぬ者そこ退クト皆々突退ケ行掛るを峯丸留て(峯)立蕃殿待た大納言の姫君を無理口説に被成ても苦敷ムり升ぬか(立)何と(峯)此通り配録所へ訴へ升ふや(立)めつそうな(峯)サア(兩人)サア(峯)何とでムる(立)是は身共が不調法最早齋世様もお越しで有ふ今にどふする待て居れト下手へ這入(勝)姫君様齋世様御越しに間もムり升(彌)慕の内へ(姫)そんなら勝の(皆)先お越あられ升ふト這入上手より道仲時晴うそ(兩人)春藤立蕃ト呼立蕃出て(立)姿を替時平公へ随んど思へ共中々以て聞入れず紅梅姫齋世の君と忍び逢ふとの詞(道)君に罪を控へ道實も科に落し御殿を退拂ひ時平公に反逆を勸込菅原の家は没落(時)今日より天國の劔を持て神諫め齋世の家來が預りにて此所へ來るは治定(道)事成就の上は一角の寝美は心任せ(立)氣遣ひ召るな齋世の君も退附來らん盜捕て御渡し申さん(道)出來した立蕃(時)とかふ云ふ内君も來らん(立)委細は後程(道)必劔を(立)心得升たト唄に成此一件下手幕の内へ這入向ふより松月郡代娘形り抱帶菅笠を持出跡より必四人同じく抱帶菅笠を持出て皆々嵐山の花を譽る臺詞渡つて此道具返し造物やはり一面櫻の立樹後山幕にて賑敷鳴物に成向ふより半素袍股立の鐵棒持四人出る向ふより齋世寶衣を着て中啓を持少し酔たる躰跡より官女四人他出の形りにて齋世官女の肩へ掛り出る跡より仕丁柘榴丸谷丸又九郎外に供の仕丁太刀を持跡より袋入の傘茶辨當を持其外大勢附出る(齋)

皆の者太儀(柘)當今の御神像御祈の爲(又)我々三人お迎に参りし所(柘)途中にて御目に懸り(皆)恐入升てムり升る(齋)花見の用意は能か(柘)御意に随ひ希世清貫様には林の内にて別殿を構へ置升てムり升る(又)先御入(皆)有られ升ふ(齋)暫時休足ト順に成官女の肩へ掛り皆々上手へ這入後ロより以前の松月必皆々出て松月は齋世の方へ見惚て居る(○)申松月様一寸加茂へ行ふではムり升ぬか松月様々々(□)何をうつとりとしてムり升る松月様(皆)松月様ト大きく呼ぶ松月心附て(松)何ぞいのふちやつとおじヤト上手へ行ふとする(○)申々どこへお越被成升る(□)加茂へはこちらでムり升わいな(松)夫でも行度わいなト又行ふとする(△)アノ美敷器量なら御尤どうぞ御逢せ申度物じや(皆)仕様は無かいナアト此時奥にて局の聲にてあれへお越し被成升せト秘聞て(○)アレ(向ふ)加茂様が(局四)サお越あられ升ふト上手より齋世局四人に連れられ出て來る秘見て(皆)夫りや加茂様じやト松月を皆々寄て突遣る松月耻敷思入(松)別御殿にて餘程お過し被成た故(竹)酔をお醒し(四人)被成升ト床几へ掛させしとね煙草盆を出す松月を秘は齋世の傍へ突遣る(松)君のお傍へ下賤の身で(皆)下り升い(松)は(齋)見馴ぬ女子何ぞ子細が有ふ(櫻)君の御詞(皆)御用が有ば早く申上ト松月顔を上げて(松)どうぞ人をおよけ被成て(齋)官女共暫時扣(四人)畏り升たト這入る(齋)其願いは(松)お願と申升るはト櫻の木を見て(○)ヲ、夫トのつどの合方に成松月櫻の枝を折差出し(○)お願は此花でムり升(齋)櫻の花を持て願ひとは(松)一寸あな

のお手へ松が手からト渡そふとする(齋)待つしやれそなたは何國の誰人(松)私は○お恥敷事乍自風情が押附に惚たどちさげしみ戀に貴賤の隔は無といへばち叶被成て被下升(齋)其志は嬉敷が諸郷への思惑又の逢瀬を待れよ(松)いつお目に掛ふやらどうぞ願ひを(齋)ハテしつこいと云に早く歸られよ(松)ハア、ト泣伏す(○)松月様御參詣がおそふ成升るトいわれそろ(○)と花道へ行立留り(松)咲初て見るより早き夕櫻散て跡なき人の身の果(□)サお出被成升(松)夫でもト心殘る思入神樂に成必無理に引張遣入官女出て(松)恐多くも君には御一人希世様清貫様お待兼(皆)お越被遊升ふ(齋)皆も參れ(皆)ハア、ト唄に成齋世先には上手へ遣入仕丁柘榴丸出で床几の褥を見て(柘)同じ人間でもアノ様に立派な布團を敷お掛被成は唐土の阿房宮で有ふか仕度事は仕次第ア、上ツ方に成度物じや○責て此布團の上へ乘眞似などしてこまそふドレト褥を敷そつと乗り長煙管で煙草を香香包を見て○何じや花の別と書て有は此火入にて薫て見様○モウ七ツかいナ追附花の別れの時刻ト香を打明ケ○眞似と出掛様かト唄に成本釣鐘を打込花散る香をき、打解し思入向ふより仕丁舍人之助竹ぼふきを持出て香をき、乍立留り(舍)いつも聞た齋世様の花の別ハテ心憎ひ香りじやナアト思入(柘)花の散は風の科忽ち碎けて花吹雪ト香包の上を見て○こいつは面白ひと此時蝶大分ドロ々々にて出る兩人急度見て(兩人)ハテいぶかしいト運氣の合方に成(柘)香の薫りに散花を數多の蝶の群遊ぶは(舍)取も直さず壯子が夢の蝶の吉凶(柘)散行花にアレ

く合點の行ぬ(舍)主家に凶事の有知らせか(柘)花物云ねど(舍)ハテ苦々敷(柘)前表じやナアト合方替て蝶散亂なし(舍)わりや新參者柘榴丸ではないかト舞臺へ來る(柘)わりやどこへ行あつた(舍)方々見て居た(柘)油計り取さらしてモシ途中で狼藉者君に凶事でも有時取て押へる器量は有舞一寸は武藝の心掛が有か(舍)新參の身で我知て居かよ(柘)我達とは違ふわい(舍)面白いそふ言やそちをト竹ぼふきにて打て掛るを留て(柘)どつこひ油断はせぬわいト突廻す(舍)所をかふト打て懸る一寸立廻り柘榴丸は竹ぼふきを引たくり舍人之介を散々に打(舍)手の内見へた(○)ト逃て遣入(柘)已れ仕丁の身分で推參なソレト行掛る久納運入旅形侍版箱を持橋懸りより出て顔を合せ(運)ヤ荒島主税様(柘)コリヤト邊りへ思入○シテ子細は(運)孔雀三郎様より過急の御狀ト差出す封を切て見(柘)承知致た返書は跡より早く歸れ(運)心得升たト下手へ遣入(柘)左衛門が預る天國の御劔奪ひ取よどの文體時平公と合躰なし四海を望と思へ共善惡分らぬ時平公先邪魔に成るは左衛門今日は則加茂の祈念刀を持參しうせるで有ふ先夫迄は仕丁の柘榴丸ドリヤ様子を伺ふかト上手へ遣入ると峯丸舍人之助出て(峯)舍人之介(舍)合點の行ぬ柘榴丸正夫に似合ぬ彼が手の内(峯)又九郎めもどふやら同腹(舍)彌々名虎が殘黨に極らば引縛て糺明させん(峯)荒立ては逃失ん(舍)君の御供に引添ふて事を探ん(峯)夫なら舍人之介(舍)峯丸ト思入有て遣入(峯)又九郎めを引く、りト行ふとする所へ姫附の秘四人櫻の枝を持襷鉢巻にて出て峰丸を取巻(皆)動かしや

八
んすな(峯)何とさつしやる(○)舍人に似合ぬお前の器量(□)お姫様に願申(△)此櫻の枝
を持って(×)否應いわさぬお前と勝負お姫様の御意じや峯丸殿(峯)夫ならおれに皆負升ぞへ
ト爰へ又九郎谷丸も出て(又)嫌がる者は取置て(谷)おいら達に随ふ氣は無か(又)併しこつ
ちは三人女子は五人(谷)先のつけに此彌生をト○を捕へに掛る皆々ごつちやに追廻す幕の
内より勝野長柄の銚子盃を持出る女形皆々出て這入勝の真中へ三寶を差出し(勝)御上意
(三人)何御上意とは(勝)齋世様の仰にて皆も草臥つらん此御酒頂戴あれ(柘)酒じや(又)被
下物とは有難ひ(柘)手酌で直に(勝)頂戴召れト三寶銚子を渡し這入跡浮た合方に成仕丁皆
々酒を呑齋臺詞有て替りく酌をなして酔ふたる思入(柘)述懐言ふでは無れ共酒は呑し
て貰ふたが肴は何もなし下部の奉公と言ふ物は止だ仕丁奉公してから女子の肌は不知あん
まりで物が言ぬト横に寐る(又)何だ述懐ぬかして寐てけつかるおれは又酒で世を暮す酒は
愁の玉掃色と酒との世界なりじや(柘)エ、やかま敷(谷)能しやべる奴ト無理におこるト思
ひく捨臺詞にて三人上戸の事有て皆々寐る能程に又九郎むつくと起上り邊りを見廻し柘
榴丸も起上り(又)荒島主税(柘)紀長谷雄(又)妾を替仕丁と成て折を伺ひ天國の劍を奪ひ取
時平が合躰なすかなさるるか本心探り孔雀三郎に對面して事を計はん是より直に加茂明神
へ走行當麻左衛門の劍を奪ひ歸られよ(柘)シテ貴殿には(又)某は齋世の君を引かたげ捕子
となさん(柘)必ぬかるなト柘榴丸向ふへ走り這入(又)ドレ齋世の君を奪ん歸りの道にてそ

ふじやくト下手へ這入谷丸起上り(谷)我推量に違わず紀ノ長谷雄荒島主税天國の劍齋世
の君を奪ん工み左衛門様に告知らせ御油断無様○アノ長谷雄めをくし上君の災ひをムウ
○爰に待受事の様子をト櫻の影へ忍ぶ向ふより左衛門繼上下にて官人二人刀の箱を持出て
(左)最早何時(官)七ツ過でムり升(左)此箱は爰へ殘し其方達は暫時休足致せ(兩人)ハ、ト
箱を床几へ置下手へ這入(左)神職方にて餘程の隙入○是に附ても齋世様の身の上姫君を暮
せ玉ふ由時平公姫に心を掛る由夫を意恨に佞人共はびこり菅原に凶事有ば御殿は關ハテ如
何致た物で有ふナアト思案の思入養老の謠に成「君は船臣は水水能船を浮べくして臣能君
を仰ぐ御代もて幾久敷も盡せしやくト是を聞思入有て○ヲ、夫よ唐土の安寛と言物關陽
と言婦人におぼれ既に其家亂れんとせし折柄關陽が家臣慢貫と言物家の大事には替られぬ
と現在の主人を盜取二年餘り閑居へ忍せ家を立しとあるア、是其關陽すべき慢貫か有るト
此時仕丁起上り(舍)峯丸我身一所に來てたも(峯)おれは爰に待て居る(舍)夫なら二人一所
に行ふかひと兩人上手幕の内へ這入内にて峯丸舍人之助の聲にて○一寸あれへお越しあら
れ升ふト言ふ勝野いそくとして出て(勝)夫を待兼升た齋世様お越し被成升るかゑト是に
て齋世出て女形皆々君様じやく(峯)君へ申上度事がムり升て(齋)シテ何事じやト掛る
(勝)私が口から申憎ひ姫君直々に(姫)お傍へ御出被成升せト突遣る姫耻敷思入にて(姫)度
々送る玉章のお返事必ず替つて玉るなゑ(齋)夫なれば戯れ事かと疑ふて居升たわひのふ

十
 (姫)其御詞に偽り無ばお情を(齋)偽りならぬ證據は此短冊ト出して見せる(姫)自が送りし短冊此下の句(齋)我詠掛し上の句春來れば柳の糸も解に覺(姫)むすほふれる君が心を(齋)そもじの返事(姫)お嬉敷ふムり升(峯)戀の叶ふた印の短冊ヲ、夫々今日はマアお歸り被成升せ姫君にも御車へ(姫)エ、めつそふな(勝)成程峯丸殿のいわんす通りアノ御車へ御一所に(姫)夫でも(峯)皆の衆早ふ御二人りをト昔々にて無理に齋世を車へ乗せ又捨臺詞にて姫も車へ乗せ女形皆々附て遣入ト爰へ道仲時晴の兩人出て來て(道)是勝野齋世の君へ戀の執持する何れ連て行た(勝)私が知らふ事かいな姫君と不義杯と何を證據に(時)能い／＼君のムる所はアノ身が詮議せふわひと車へ掛る峯丸出て圍ひ(峯)詮議さす事成らぬ(時道)そりや又何で(峯)此御車は齋世様の御車此峯丸が御供する(勝)必ず内を見せて被下升な(時)夫仕丁共詮議致せト神樂に成り仕丁皆々車へ掛る峯丸勝野さゝ道仲時晴立廻り峯丸勝野は仕丁を相手に橋掛りへ追込車の内より齋世紅梅姫の兩人飛下り(姫)お嬉敷ふムり升(齋)是紅梅姫今の物音二人りが戀中所詮議へは歸れぬわいのふ(姫)エ、(齋)さいつ頃より眼病にて暮六ッ限りに見へぬわいのふト六ッの鐘鳴る齋世見へぬ思入○アリヤモウ暮六ッ(姫)夫なら鳥目の(齋)一先此場を立退て(姫)齋世様(齋)紅梅姫ト兩人手を引行ふとして見へぬ故姫に連られ向ふへ遣入るト峯丸出て(峯)齋世様／＼ト車の内を見て○齋世様は何れへ御出被成れたト探しあぐねると仕丁大勢出て峯丸やらぬと取巻(峯)扱はえ番が差圖よな(仕)覺

悟さらせト掛る神樂にて立廻りト峯丸仕丁を押返え番出て車の内を見短冊を取て(玄)齋世様參る紅梅姫是こそ不義の證據歸りを待受ト行ふとする谷丸走り出て行當り(谷)うぬはえ番紅梅姫は何國にムる(玄)姫は齋世と欠落したわひ(谷)何スリヤ夫をやつてはト行ふとするえ番留て(玄)コリヤ待おれが先へ姫を時平公へ(谷)邪魔せず退ク(玄)否じや(谷)面倒なト臺拍子にて兩人立廻り有て能程に見得に成此引張宜敷拍子幕
 同貳段目口幕

舞樂殿左遷の場

- 一 菅原 道實
- 一 藤原 時平
- 一 左仲辨希世
- 一 三好 清貫
- 一 春藤 玄蕃
- 一 判官代輝國
- 一 唐使天蘭敬
- 一 大納言末房
- 一 左大辨晴清

- 一 姫 千代
- 一 子 役

- 一 宰相 房則
- 一 中將 春行
- 一 同 元家
- 一 同 政道
- 一 久納 運八
- 一 當麻左衛門

家來笠見藏人

造り物一面御簾附の欄間始終管絃にて幕開くと向ふより希世舞臺上手より道仲出て(道)希世様(希)過急の御召ハナ(道)道實卿わな(希)追附參内仕る(道)御殿へ詰升ふか(希)御同道仕り升ふと行掛る清貫出て(清)直宿の武士に用事有是(道)ハアト呼ぶ立蕃輝國の兩人鳥帽子半素袍龍頭卷にて向ふより出て(立)參上仕て(兩人)ムリ升る(清)道實參内有ば記録所へ相詰よとの仰(兩人)畏てムリ升るト戸屋にて道實公參内ト呼ぶ(清)此趣御殿へ知らせ升ふト皆々奥殿へ這入る管絃きつ張と成向ふより道實出て本舞臺へ掛るト欄間の殿上の札トロくにて落る(實)ハテ心得ぬ右大臣と印せし文字失せしは正敷凶事かト思入有て道仲出て(道)道實公イヤ御殿へ(實)如何様相詰升ふト兩人静々這入ト木に付御殿せり上る造り物中高貳重正面紋板上下共後口へ寄て御殿欄間不殘半簾正面簾下し三方共きと橋高欄附木地

造り真中に末房清貫道仲時晴兩家躰に房則希世元家政道運八皆々公家の形りに並び居て管絃にて道具留るト下手にて道實參内ト道實跡より立蕃輝國附添出る房則春行元家運八バラくど下りて道實を取巻(四人)動き召るな(實)何を持って此道實を(清)如何道實公何不足有て我國を傾んと工んだ(末)清貫公お待被成逆心有證據ばし有ての事か(清)證據と云ふは此短冊ト短冊を出す(道)殊に齋王君紅梅姫嵐山より行衛不知察する處館に隠し世に立てん工みで有ふ哉(春)道實が爲には命惜まぬ一味徒黨の企有(清)掛る反逆を右大臣様とは(希)中々以て恐有(清)今より官位を召上イ守護の武士早くト立蕃ハト行ふとする輝國突退ク(輝)コリヤ何とする(立)官位をはぐに輝國何で留る(輝)輝國有を立蕃チト無禮でムふ(立)如何様拙者が無禮御免被下(末)齋世の君紅梅姫不儀の悪名有と雖も道實公御存知無事夫をお館へ引込有とは是リヤ悪舌と云物(輝)末房公の仰の如く京洛中の童共道實公を慕ふト筆の徳夫を捕へて一味徒黨何どは悪人の取沙汰(立)成程云ば云ふ物云譯叶ぬ證據を捕へて置た(輝)何證據是へお出しやれ(立)お目に掛ふ道實へ一味の科人は(引立い)侍(ハアト)天蘭敬を細に掛引出す道實見て(實)天蘭敬其いましめは(天)是申道實公口惜敷ムる衆て示合せし通り我國の大王へ通達し此日の本を唐土へ随んどの契約好文木に事寄某が來朝大王より送られし書翰を無念や奪取られ此細目道實公何も彼も白狀して仕舞やれ(末)天蘭敬が内通にて慥な證據が手に入しな(清)其一通是に有ト出す(輝)スリヤ其一通が(清)謀反

の證據(輝)ホ、ホイト打向(實)如何程證據有共此身に覺へぬ無實の難題我を失ん計ひに疑
 本し(清)差當る天關敬が自身の白狀にて道實が官位を取上筑紫太宰府へ遠流せよと嚴命
 (輝)何道實公を(末)是非が無ト顔見合思入希世出て敬々敷臺へ御書を乘(希)道實公へ御書
 伴の道仲讀上召れ(道)ハ、ト開き○右大臣菅原道實此度反逆の沙汰分明ならざるに依て筑
 紫に流罪せしむる者也伴の道仲承つて如件ト道實の前へ置き道實愁ひ(清)嚴命蒙り先此通
 りト道實の冠を笏にて打落す道實ハタトうつ向輝國堪兼て(輝)如何に嚴命とて餘りと言は
 清實公(玄)かばい立する柄は汝も同類(輝)全以てチエ、ト拳を擲り扣る希世手を打て(希)
 知らなんだ掛る謀反人とは夢にも不知モウこつち柄弟子師匠の因みを切て希世が言譯せぬ
 ば成らぬト末房下りて(末)道實公嘸口惜敷ムり升ふ(實)我初冠の始より天恩を重んじ禮を
 以て上に使へ仁を以て下を惠み最前參内の折柄殿上の文字落たるは無實の知らせ周の文王
 は久里の獄舎に入玉ふ夫は對する敵有道實には敵も無ア、淺間敷御代じやナア(希)弟子師
 匠で無と云ふ申譯に細打て白狀さす謀反人腕廻せト道實の手を引附る輝國夫をと寄る(皆
 々)嚴命じやぞ(輝)ハ、ト扣へる籠の内より(時平)旁々待れよト御籠卷上出る輝國道實を
 圍ひ(皆)時平公(清)何故かばい召る、(平)事々敷罪の次第時平委敷聞届た去乍今少々明ら
 ぬ(希)わからぬとは(平)今此時平と肩を并ふる兩臣謀反を企可謂無し詮議有は天關敬彼糺
 問せば相わかる道實を糺明せんとは鹿忽で有ふ(希)イ、ヤ慥な證據は異國より送りし密書

何と退れは有舞ト件の密書を出す(清)繪言は汗の如く出て再返らぬ道實が虛名(希)掛る罪人
 をかばい立有てお咎蒙る御心か(皆)サア、ト清實は短冊希世は密書を突附○何とで
 ムる時平公ト時平短冊を取て(平)是非も無世の成行退れぬ證據は此密書天關敬が自身の白
 狀彼是以て重る證據去乍一天四海の政事此時平と道實執行は、天下泰平左右に並ぶ兩臣今
 より貴公左遷有ば日月二ツ片々に片羽もがれし雲井の御歎き時平が心の悲敷さを推察あれ
 道實公(實)コハ惠有御歎き道實虛名蒙つて身は荒磯の島守と朽果る共魂は都に通ひ大君を
 守護し奉らん是今生の名殘共思ば果無身の成行(平)道實公(實)時平公ト手を取替し愁の思
 入ト官人走り出て(官)菅相丞の門弟の童親共御暇乞御見送願升るか如何計ひ升ふ(清)成
 らぬ、妻子眷屬に引放し五畿内を拂へとの嚴命夫道實を退拂へ(玄)ハ、ト此時後ろより
 玄蕃待たと言ふ(玄)何とト管絃きつ張成藏人上下にて出て(藏)玄蕃待つまやれ(玄)當麻
 が臣笠見藏人(玄)清實公の下知何でウマ(皆)妨致す(藏)イヤ御身に覺無無實の難に落させ
 玉へど右大臣道實公玄蕃如きの引立會は餘り法外師の恩を知り暇乞を願ふまほらしき童共
 謀反のかどふ人杯と御意被成るが何ぞ證據がムるか(玄)去れば(藏)證據が有ば出しやれ
 (玄)サ夫は(末)藏人扣へ高位に向て尾籠千萬時平公如何思召(平)藏人が申通り暫時の暇乞
 (皆)イヤ其儀は(平)時平が赦といふに扣へられよ(皆)ハア、(平)夫計へ(藏)夫童共是へト
 官人橋懸りへは入(玄)藏人汝が主人は先達て天國の劔紛失の科有身でのめ、御殿へ(藏)

夫を汝が知ふかひ○時平公御劔詮議三ヶ年の日延御暇の儀を(希)寶紛失の願は五十日か百日敵討では有舞し三ヶ年とは呆れて物が言れぬ(清)ヨモ御聞届は(皆)有舞(平)聞届た○今名虎が殘黨はびこり御劔急には手に入舞末房公何と思召(末)彼が先祖は當麻○代々忠臣と言三ヶ年の暇乞子細ぞ有ん聞届御遣被成い(平)時平が情を以て聞届た當麻左衛門に申聞ヨ誰か有手箱持ト内より官女手箱を持出る(藏)御聞届被下しとな重々の御厚恩直様御暇ト行掛る(平)賤別吳ふ(藏)賤別トナト時平手箱より關所の往來切手を出し(平)夫トやる(藏)關所の切手忝い(平)是より直に(藏)然ばお暇ト向ふへ走り這入(希)此希世師の恩を報ぜん爲今日より大内の筆頭と成様時平公宜敷御執成と(末)弟子の身を持って師匠に敵對人非人官位裝束を召取五畿内を這拂ひ輝國苦敷無立寄て政法行ふて能らふ(輝)畏てゐる希世お立被成ト官人立掛希世の裝束着類をはぎ取丸はだかにして突出す希世面目無思入(希)ア、憂天變の世の中じやナア餘りつれない時平公輝國め迄むごふするとはヤレト官人に這立られて向ふへ這入橋懸りより子供衆御赦が出た急でト言ふ子供大勢出る(平)夫皆を暇乞をト子供三拾人程手に梅の枝手本双紙を持手をつかゑ道實を見上る(實)ア、まほら敷皆の者我手風を學び師匠と思慕ふやさしと手習學問の守神と成可ぞや我無跡に我頼め一首は記念○流れ行我は水くつと成ぬれど君柵と成を見留よ○便も有ば時平公名殘を頼入る(平)這附大君の御心なだめやがて目出度春を待れよ(實)エ、忝ひト行掛るを袖を扣(平)仰殘る

事有ば(實)只何事も御國の御事(平)必承知致てゐるト顔見合愁の思入(兩人)おさらばト官人出る(末)末房御見送申さん(玄)きり／＼失ふト管絃かすめて忍三重の合方官人附添静々歩行子供皆々袖にすがる敵役の公家附て向ふへ這入跡より玄蕃輝國向ふへ這入時平花道際より愁の思入有て元へ戻り邊り見廻し天蘭敬の繩を解(天)時平公(平)コリヤ○黄金十兩館にて請取歸れ(天)忝ひ(平)早くト天蘭敬橋懸りへ這入る時平始終向ふへ思入短冊を出し(平)春來れば柳の糸の解に覺結ばふれたる君が心を齋世様參る紅梅姫ト腹の立思入○ほて苦敷トチョント御籠上る短冊を打附二重へ上り眞向に急度見込詔の鳴物に成向ふ遠見に成思入有て○道實の大だわけ○我若年乍重代の攝家左大臣と任じ道實わづか位官右大將に昇進し此時平より官位は右に有乍唐の關白の位菅相蒸と敬れ後には攝政關白に昇らんと目の邊り見るに忍ず黄金に心迷ひし毛唐人を取込希世めをぼつ拂道實めを遠流の身となし我本懷大馬鹿の道實時平が涙を賊と思ひ大君の守護を頼む杯どうつそりめ紅梅姫に心を掛居れど夫と明さぬ我心外道實さへぼひまくれば政道は我心の儘天國の劔を手に入我に敵する青公家原一々に蹴殺し大望成就の血祭にせんアノ道實我謀反の網に落しかハテ心よヤテモ道實はいかい阿房じやナアハ、、、ム、、、ハ、、、トきざ橋二段下りどんと腰を掛高欄にもたれ○ハ、、、ト大笑ひ宜敷幕

同貳段目

土師村の段

- 一 孔雀 三郎
- 一 宿禰 太郎
- 一 武部 源藏
- 一 當麻左衛門兼氏
- 一 齋 世 君
- 一 奴 宅 内
- 一 判官代輝國
- 一 紀ノ長谷雄
- 一 土師 兵衛
- 一 奴 可 助
- 一 同 角 内
- 一 袍衣 甚作
- 一 同 又 作
- 一 奴 市 八
- 一 同 八 平

- 一 後室 覺壽
- 一 松 月 尼
- 一 女房 葉櫻
- 一 浪人さより
- 一 紅 梅 姫
- 一 秘 初 雪
- 一 同 夕 霜
- 一 同 楓
- 一 同 早 枝
- 一 仕丁中通り不殘
- 一 侍
- 一 家來 大勢

一 仕丁 軍藏

造り物平舞臺上手門出遣入真中より東へ土堀此上浪面の模様都而河内國土師村道明寺邊りの武家門兩方に盛砂有り白囃子にて幕開く茲に奴宅内可助角内の三人掃除して居る(角)今日は後室様御連合の御命日故ち姫様を御連被成て御佛參(可)昨日迄は流し者の客で邸は持返しおいらが爲には厄介公家じや(宅)是二人共大切の客を誘つたら後室様の目玉を貰ふぞト門の内より秘楓早枝出て(早)菅原の相丞様の事を何事を沙汰仕遣るのじや(可)昨日御立で助たど申たのでムリ升(楓)相丞様は後室様の甥の殿様(早)葉櫻様や松月様に告るぞや(角)めつそふな(宅)段々の不調法(可)御赦し被成て被下升せ(早)以後をたしなまつしやれ(楓)御下向に間も有舞トレお迎に兩人は部屋へ行きやト琴唄に成宅内は向ふへ跡不殘門へ遣入引違て向ふより紅梅姫走り出てこける(姫)爰迄は來れ共物堅い土師のお館幼時去りし故勝手は不知姉様の葉櫻様や松月様に逢て齋世様の御物語せし上お頼申が能らふかト思案の思入向ふより宅内出て手を遣る(宅)あなた様は(姫)自は當家の娘じやわいのふ(宅)エ、(姫)幼ひ時道實様が父上に御所望有し自じやわいのふ(宅)扱は紅梅姫様でムリ升かシテ河内へ御越有しは相丞様に御名残を惜み御暇乞に(姫)何相丞様が此お館に(宅)昨日御立でムリ升る(姫)一日違ふて御目にも不掛いたづらの此身情無し御免なされて被下升ト向ふへ手を合す向ふより後室様の御下向と呼(宅)ア、モシト姫を連下手へ遣入向ふより覺壽禰提

帯杖を突出る跡より葉櫻同じ形花手桶へ櫻を入持跡より松月尼振袖前帯同じく花桶へ小松を入持出る乳母同敷手桶へ紅梅を入出る跡必供廻り附添門の内より早枝楓出迎ふて(早)何れも様只今御下向(兩人)遊し升た哉(覺)色埋む垣根の宵の頃乍歳のこなたに匂ふ梅々枝(葉)春來てぞ人も取覺山里は花こそ宿の主人成覺(松)忍れん物とはなしに小倉山軒端の松の馴て久敷(覺)相丞様は冤の御流罪夫に別れ續く此身の無常の世の中推察して玉ひ(早)先ち歸り(皆)遊され升ふト此人數本舞臺へ來て(葉)私共三人は兄弟でも心は別々紅梅様は菅家へ御養子松月さんは髪を下し沙門に入と此河内へ戻もせづ兄弟三人が此様に心の違ふ物かと不斷申て居升る(松)浮世のちりを拂ば清き松月尼(乳)今度道實様御流罪に附都の庵りに籠居る松月も呼に遣り相丞様御立の跡で留て吳いと親心サ親御様へ大不孝と申所へも心が附升ぬか(覺)子は三人持乍一人は菅家へ養子の紅梅又一人は男を嫌ひ出家順世今一人の葉櫻は折角縁は組しかど兵衛殿の悴太郎は健亡の病ひ夫故兵衛殿へ預置しも是葉櫻モウ今日太郎を迎ひに遣りやいのふ(葉)畏り升た未だ松月様や小より一度も逢ぬ夫太郎(乳)病ひは御藥上れば御全快被成升ふ治り兼るは此子じやわいな貞女を立ての尼法師何が不足で母様御兄弟に答も無髪を下し遊した(松)母様姉様勘忍して被下升ト下手より宅内姫を連出て(宅)後室様紅梅姫様の御入御對面有られ升ふ(葉)お前は菅家へ御出た紅梅様(松)本に妹(姫)母様御ニタ方御無事で(乳)思掛無(秘)紅梅姫様(姫)母様御なつかしふムり升ト覺壽

の傍へ行覺壽持たる杖にて姫を打皆々驚く(葉)母様には何故に御打擲殊に都柄はるく(と(松)人に遣れば我子で無と仰しやつたは空言でムり升るか(葉)母様(松)覺壽様(覺)おりや人の娘は打ぬぞや親も許さぬいたづらして大事の甥の殿流され玉ふは紅梅故此杖の折れる程叩ねば相丞様へ言譯が無わひのふ(姫)御尤でムり升父上のさすらへも自故と世の風説聞に不忍此河内を志し尋て來る道すがら齋世様には追人の難ではぐれ申よふ(茲迄參り升たも父上様へ母様柄も詫の願を申御二人様御託言をお願申上るト舞臺の皆々愁の思入覺壽三人の前に有梅松櫻の手桶を取前へ置合方に成(覺)菅原の御先祖は夫ト郡領殿とは無二の一家白鶴千羽飼は高位に可成娘出生するとの教千羽の鶴を飼程のふ懐胎産落せしは三ツ子の娘此三本の梅松櫻佛前へ捧げ子供の無事を願んとそち達が行末案事する親の因果(松)何卒三人相揃御佛前へ(三人)此花を(覺)不孝の寄合備る事成らぬ(三人)何故でムり升る(覺)紅梅は幼より都へ飛他家を繼木の散行其身ト梅を姫へ打附る○又此松は一人の親を振捨て葉櫻を手折出て行つれなさと松を松月に打投○花の姉にて土師耻を雪ん物と取し舞アノ様な健亡病可愛や櫻は其身を散す入相の何で此花手向に成らふぞ(姫)自故姉上達もト云を杖にて又打(覺)梅は飛ぶト櫻を見愁ひ○櫻は枯るゝ世の中に何とて松はつれなかるらんト松月に云後口を向(三人)申母様ト取附を拂ひ(覺)子は三界の首かせじやナアト唄に成靜に遣入續て秘遣入跡兄弟ト乳人宅内残り思入有て姫は宅内の刀を取(姫)姉上お去ばト自害

せふとするを皆々留て(宅)何故の御生害(葉)早舞て被下な(乳)御待遊せ升せ(姫)放して被下母様の御詞御無理も無齋世様に御別申父上に御目に掛り御説をと尋て來たかひものふ御立に成何卒放して殺て被下升せ(乳)姫君今御果被成ては相丞様へ孝が立升るか(松)不孝に不孝の上ぬりして齋世様に一生添れ様かト皆々留る先走りの歩徒三人出て來て花道に立留り(侍)河内郡領屋敷は是か御上使として中納言友秋公お入ト云捨引返し遣入(葉)思掛無御上使ハテ心得ぬ(宅)此事を兵衛様に御知らせ申さん(葉)太郎様へも此事を(宅)心得升たトり、敷遣入(松)母様へも此由を(乳)密に部屋で紅梅様(姫)何れ過さぬ今宵は此身(乳)御出被成升ト唄に成此人敷門へ遣入道具返し造り物貳重舞臺物一面の襖欄間宜敷太鼓入唄にて道具留るト向ふより御上使御入ト管絃に成奥より覺壽秘四人附て出る向ふより中納言友秋公家形りにて跡より兵衛摺はがし燕天上下大小にて出る家來仕丁大勢附添花道に留り(覺)御上使様には遠路の御下向御苦勞に存升るト皆々本舞臺へ通り○シテ御上使の趣は(友)上意の趣余の義に不有此度管相丞左遷の上は左大臣時平公外席に立せ玉ひ四海の事は時平公の御心の儘御政道を改玉んと此土師の家に預りし家の重寶内見せんと罷越たる中納言友秋(兵)ハッ御上使御下向と承り難有上意時平公の思召覺壽聞れしか(覺)此土師の家は代々天國の劔下し玉る其折柄(兵)全た其節當家へも雄の劔大切成家の重寶(覺)幸今日は夫トの命日聳太郎が歸りなば御内覽に備へ升るでムり升る(兵)忰太郎は健忘にてうつけの病ひ(覺)

ハテ河内一國を取扱ふ聳が役目(友)シテ太郎は今に歸らぬか(兵)忰太郎引立參れト此時戸家にて(葉)アイヤ河内の住人宿禰太郎重吉只今到看仕り升たト花道より葉櫻太郎を馬に乗せ口を取ツ、カケ鳴物にて出る太郎衣裳馬乗袴着流しにてこわく馬にしがみ附出て本舞臺迄來て(葉)眞平御免被下升ふト馬より宅内太郎を下し○父の命日佛參の折柄御上使御入早馬にて只今歸着不禮の段眞平御免ト太郎の両手をつかせ○被下升ふト辭義をさせる宅内馬を更て下手へ遣入る(兵)忰御上使へ御挨拶をト太郎兵衛の顔を見て(太)誰やらで有たのふ(兵)親の兵衛だわいと太郎帳面を出して(太)何じや兵衛とはおれが親仁様と書て有る(兵)ハテにがく敷(太)ハテ甘々敷(太)申女中どなたのお屋敷でムり升る(葉)是々申我夫葉櫻でムり升る大事の場所じや氣を慥にお持被成升せト太郎又帳面を出し(太)ヲ、女房葉櫻はわしが女房と書て有(兵)御上使の手前面目次第も無忰が振舞(覺)是迄不便や葉櫻が祈り祈禱はまだな事本服の無と云ふはアノ子の業か娘の因果か土師の家名の衰へかど心を苦しめ居り升る(兵)シテ内見の一條は(覺)歸りし上は身を清めさせ御上覽に備へ升ふ暫時御休足を(友)如何にも願に任せ休足致すで有ふ(覺)夫御案内(必)ハッ○御案内仕り升ふト平伏する(覺)太郎おじや兵衛殿にも(兵)アイヤ身共は老躰自由乍暫く是にて(太)どなたぞ御てうづに行度ト覺壽太郎の手を持って(覺)葉櫻は兵衛殿へ饗しイザ御上使様(友)然ば旁々(皆)御入有られ升ふト唄に成此一件奥へ遣入跡に兵衛葉櫻殘る(葉)眞御様御勞れなれば御

ゆるりと(兵)そなたを見るも此兵衛は悴不便とそもじのいとしき神も佛もムらぬわひ(葉)御道理でムり升(兵)嫁女一生の頼が有が聞ては吳舞か(葉)改た父上の御頼何事か仰志やつて被下升ト合方に成兵衛小聲にて(兵)外でも無薄墨の墨附まつた雌の御劍盗出して貰ひ度(葉)エ、(兵)驚きは尤二品盗ませるは皆是悴が爲の一條だは(葉)太郎様の御爲とは(兵)其子細は悴太郎が健忘は則業病彼二品を頂せなばモシ物の怪ならば即座に立退き病は本服先刻聞ば郡領殿の忌日佛間に飭り有と聞何卒密に悴に頂す懸膽〇是嫁女悴が不便サ聞入て被下いのふト大泣葉櫻色々思入有て(葉)成程盗升ふ(兵)得心か悴に頂せたら直元へ歸して吳(葉)夫の病氣本服なれば此身はどふ成とて(兵)夫が女の賢女貞女(葉)夫なら父上(兵)嫁女密に(葉)アイ(兵)隠密トト誂の鳴物チョン々々返し暮六ツの鐘にて道具返し造り物中高上下障子家躰後口瓦燈口上の前泉水上手欄間七五三を飭り此内上段に天神の木像を飭り下手鶏の戸家二重に松月菓子盆に菓子盛て居る紅梅姫香を薫らし必二人引飯を白木臺に入れ居る乳人燭臺を見せて居る見得にて道具納るト合方に成(姫)姉様のお取成にて母様の御機嫌も直りお嬉敷存升る(松)紅梅も自も親に苦勞を掛し身の上無理にお願申せし故お聞入被下しも可愛故でムんすわいな(乳)腹立てる中に目には涙を持てお出被成る可愛のふて何と致升ふ(必)松月様此お供物は(松)いつもの通り小夜里様へ(姫)申姉様どなたへお備遊す(松)是はアノ一間の内に相丞様の御木像がムんす乳人小夜里か母様ならでは備

に行事は成らぬわいのふ木どな思ひそ紅梅様(姫)夫なら責て父上様の御木像に(乳)申姫君様覺齋様のつれのふするも羨ひ親へ立る義理御逗留の其内に記念に姿を繪で成と作つて成どし仰しやる故相丞様が三度目にアノ木像を作り立相丞様が紐ひ残す記念とて残し玉ひしアノ木像サお拜せ升ふト手を取捨臺詞にて障子を開く木像の前に齋世寶衣を着流し立て居る(姫)ヤあなは(齋)紅梅か(姫)おなつか敷ムり升ト取すが(乳)お聲が高ひ密にト此聲に松月一間を覗き(松)ヤあなはト行ふとする(乳)勿躰無齋世様じやぞ(松)嵐山の遊覽で(齋)本にとふやら(姫)アノ姉様を(齋)花の小枝で暫しの詠め(松)手折て返る心なき(姫)お別れ申て覺期極て居升たに爰でも目に掛るは不思議の赤縁(齋)ま一度逢度計りじやわい(松)紅梅が云換したは貴君でムり升か(乳)必ず隠密ト叫く〇(必)心得升たと這入(乳)人目に立ぬ其内にサ紅梅様(姫)齋世様(齋)乳人とやら松月殿(松)思ひ掛無と寄らふとするを乳人さゝる障子入る松月一間を見て居る(乳)サア申松月様今宵齋世様と姫君を立退せねば壁に耳と覺齋様の御詞今宵八ツの鳥の謳ふを合圖に此所を落し升ふ此由を私は覺齋様へお前は葉櫻様へ申松月様(松)乳人何ぞいやつたか(乳)是は又情なひ今宵八ツ鳥を合圖にお二人りを密に落し升る事最前柄(松)何入聲の鳥が啼と爰を落し升るのか(乳)アイナト松月腹を立(松)乳人いや折角顔見たに入聲限落して仕舞とは胴欲な此姿と成たるも元は誰故齋世様此所に十年も廿年も置升て母様やそなたの日頃の異見に隨ふ今柄は女子

に成わいのふト愁の思入(乳)サ一時も早く御用意を(松)イ、エイのふ(乳)御出被成升ト唄に成松月の手を取引立這入床の淨瑠璃に成「入相過る土師の兵衛一ト間よりそつと拔出熊鷹眼ト兵衛墨附の箱を持出邊りを伺ひ(兵)河内一國の墨附嫁を欺して手に入今一品の雌の劔やがて取得て某に渡す合圖を待迄に認置しト狀を出し○時平公に心を通す此兵衛相丞を討取て吳と度々の内意又齋世の君をかくまふ由今宵僞迎ひの手筈も篤よりなし八聲の鳥が齋世の出て行無情の羽叩き途中でぐつしやり相丞と二人前の意趣晴し萬事認置たる此狀味い〜早く時平公へト井戸の際へ行見る「見遣る前成空井戸よりぬつと出たる仕丁の男ト軍藏仕丁にて井戸より出て(軍)兵衛様(兵)聲が高ひ此書狀時平公に届け返書請取立歸れト渡す(軍)此狀時平公へ(兵)シテ齋世迎の手筈は(軍)牧方堤の船乗共へ申附八ツを合圖に此所へ(兵)出來す〜河内一國の墨附懐中するも一大事「悪にはさとき智恵袋ほどく間も無腰刀すらりと抜て墨附を鞘の内へ落し入目貫を抜は氣轉の仕丁竹垣抜て小短く納た顔の兵衛が巧みト宜敷文句の通り有て拔身を池へ投込宅内下手より伺ひ居る(兵)是で由嫁より劔を請取軍藏行やれ(軍)畏り升た「示し合して差足拔足又も一ト間へ忍び居るト兵衛奥へは入○此上は似迎ひの手筈是より直にト行に掛る宅内出て狀へ手を掛る○コリヤ下郎何とする(宅)何とするとは古風な臺詞密書をこつちへ渡して仕舞(軍)大事の手紙渡して成物か(宅)切々渡せ(軍)何を「渡せ放せと兩人が互ひに争ふ懸競べト立廻り有て狀を宅内取軍藏を池

へ投込(宅)一大事を印た一通後室様へ「尻も頭も白紙の狀を取得て何入ト下手へ遣入「早刻限と御膳の拵へ銚子土器長柄迄何哉御意に入來る中納言の饗しと宿禰太郎は餘念無ト必四人膳部色々持出る太郎うろ〜出て(太)女中さん是は御馳走でムリ升るついでお吳ト土器取て突附る(早)是は又迷惑なお上使へ上るのでムリ升(楓)お放し遊せいナア(早)葉櫻様はどこに御出申奥様〜「呼立る間も荒氣無ト太郎銚子より呑(太)ヤレ〜味ひ肴は是か「膳部を亂す馬鹿殿に困り果たる秘共急ぎ一間へ立て行ト秘奥へ遣入太郎酒を無性に呑「立出る母覺壽出合頭に太郎が有様つく〜と見て差寄て(覺)太郎イヤサ宿禰イのふト脊中を叩太郎咽に立たる思入(太)痛い〜咽に何じや立よつた魚の骨か脇差かト大泣(覺)サ、是で〜ト土器に酒をついで○マ一ツ呑みやト椀の飯を呑し○どふじやモウ能いト太郎目を白黒して(太)嬉敷や治つた○お前はどなたまやナ「例のとばけの物忘れ顔つく〜と打詠めト床の合方(覺)是太郎覺壽じやわいのふト太郎又帳を出し(太)姑とは母様とムリ升るト辭義する(覺)是太郎宿禰いのふ(太)宿禰〜ト帳を出し考へ○夫な事此帳にムらぬ(覺)是孝行な人じやのふ義理有姑に縁の有菅家の衰へ憂つらい身の上と被爲成る流人の相丞心得難は兵衛殿若や何も角も知つても眞實の親也又姑なりや何れに隨何れを討ん僞健忘の物忘れそなた作病で有ふ哉ト云て太郎膳部の肴を刀の下緒にく〜り池の中へ打込魚釣の様にし刀を差て釣の躰○太郎返答じや○實の親に附心で出來ぬ返答か○相丞へ敵對する親

子活ては置れぬ覺期しや「心をためすおどしの刀振上れど餘念無(太)エ、中の非鯉めが肴
 皆食て仕舞ふた是婆さんの女中さん〇お前も釣かサアも出〜ト覺壽の手を取て此時覺壽
 太郎の胸ぐら取て引附刀を差附(覺)是でも本心明さぬか(太)婆さんべ〜にまわが寄と嫁さ
 んに叱られるわ(覺)是でもか「咽の邊りを刃の危さ(太)池の鯉は咽に居やせぬ魚は池じ
 や〜ト其儘指差する(覺)誠の病に違ひ無かム、「眞實ならば不便やと刀投捨引寄せ〜
 〇疑ふた故今の仕儀不便や稚子に劣つたる健忘病作病と廻り氣な堪忍して吳聲殿や「赦せ
 と計り手を取て母の涙に貰ひ來て〜ノ〜鼻を鳴らし覺ト此時乳人出て(乳)後室様墨附雌
 の劔二品見得升ぬが合點でムり升るか一聞より恠り覺壽が仰天(覺)ハテ心得ぬ二品が見得
 ぬとは(乳)殊に御上使御立服早ふお越被成升(覺)わらはが參て事を糺さん小夜里おじや「二
 間へ急ぎ欠入たり引違へて葉櫻が兵衛の手を取引立出ト葉櫻刀の身計袋入にして持出て
 (兵)何用有て此所(葉)母様の御目を掠め墨附御渡し申上雌の劔はあなたの其お刀の(兵)
 全躰何を申のだ(葉)先刻墨附お渡し申し其時劔の事申度も邊りの人前御劔は御前の其刀へ
 ト兵衛刀に墨附入有りしを悟りしと心得(兵)身共御身に何を頼んでド〜どふしたアノ内見
 の名代を頼そこで墨附の寶劔のと申のだな(葉)急ぎ二品盗出し夫の病氣直さん爲盗で來い
 とのあなたのお差圖(兵)だまれ〜何だな二品紛失故後室太郎が御上使への申譯の種が盡
 此兵衛を企に掛たかむごいわい〜ト襟髪を掴み〇動きヤアがるなト下に置刀を捨廻

と葉櫻が置し刀を抜と竹べら故にこ〜として持遊にして我刀を抜突込鞘割れる中より墨附
 出る仕丁の烏帽子へ隠し冠る葉櫻の鞘へは箸紙を入元の所へ直し是より太郎の健忘も葉櫻
 故其上我を罪に落さんと企しと難題の臺詞有て「立蹴にどふと蹴散かし(葉)覺無とは御胴
 怨折角心を碎きし二品病を治する墨附御劔太郎様は(兵)コリヤ忤親に背く此女成敗致せト
 太郎の脊中を叩く(太)誰じや(兵)親の兵衛だは(太)兵衛ト帳を出し〇ヲ、おれが親だ(兵)
 親の言事を聞物が孝行と言ふはそりやト帳面を見て〇書て有ふ哉ト太郎讀でヲ、聞ぞ〜
 (兵)親に背く其嫁手打にせよ(太)手討じやト考へ(太)斯ふか〜ト手を打(兵)去とは嫌敷
 我此ト刀を見〇刀を抜ト持添〇女の肩へ當引のだ(太)引ぞよ面白いサアだんじりじや(兵)
 斯引のじや「無慘や太郎が手を持添ぐつと肩先一ト刀ウツト散行く葉櫻と兩手に拔身をじ
 つと取(葉)胴慾な鼻御様太郎様の手を持添私を殺させ夫大事と思はこそ二品を盗取墨附は
 兵衛へ御劔は人目繁きを憚りて兵衛面の刀へ目釘を取て仕込置くお前二品頂せ直取返し佛
 前へと思ふて兵衛の刀の身私は口惜ひわいな「今端に委敷語るにぞ兵衛は恠り仰天しト太
 郎の手を放し我刀を取(兵)スリヤ奥で休足の間刀掛に掛置し某が刀の身此鞘の内へ仕込た
 か劔を此内ヨ、ト池の中を見る「手負は苦敷息をつぎ(葉)申太郎様どうぞ本服被成し
 ト回向被成て被下升せ苦敷〜腹立ヤアナ「悔敷無念との〜しる聲(兵)おとぼね立ナ「お
 と骨立など兵衛が宰配人こそ來ぬると鬼取眼大けさ切に葉櫻の根を枯すこそ無三也兵衛は

眼配りト立廻り兵衛は太郎を止メを差太郎は上に立て刀を持って居る(兵)悴息は絶たか(太)エ(兵)斯ふするのだ「ツト寄て止の刀ト入替て止を差(兵)雌の劔を此刀に仕込み有とは露不知我一刀は此池ト刀を抜竹べら故〇ハテ面様ナト以前の箸紙を抱恠り〇コリヤどふじヤト恠り太郎膳を捧げ(太)御膳お上り(兵)何をトにらむ太郎膳を落し横にへたる(太)ハ、ハ、不審そゝろにト三重にて返し造り物貳間の敷寄屋庭先櫻の立樹泉心椽先に鶏の籠有合方にて二重に松月鏡臺に櫛臺を直し美事成娘の形にて傍に秘夕霜髪を結上し躰にて楓片附て居る(楓)松月様御異見遊した後室様の御詞と替りどふいふ事で(雨人)ムリ升る(松)靜にしてたも是には段々様子の有事母様のお阿り受ぬ内奥へ往てたもト秘兩人奥へ遣入る(松)いつぞや京内詣の其時ふつと見初たお公家様いとらしい可愛らしさも彌増に計らず思わす今日爰でも目に懸つた私が心嬉敷様で悲敷様でモウ坊さんがいやに成願込だる佛門も未來は儘よ此姿をば見世度けれどお名を聞ば齋世の君と聞て恠り其上に妹紅梅が言替したる戀人とモウ何ぼふ妹でもアノ子は初手柄の事じやに依てアノ君なら頂いてト數珠とけさを蹴散し〇今朝迄は未來を願ひ二ツにはどふも切られぬ梵腦の犬に劣りし我心今宵如月十二日早西に傾く八ツの時刻〇本に最前聞た八聲を合圖に齋世様と妹を迎いに合圖の八聲「見廻すこなたの様の先やがて時刻か鶴の羽叩き〇是々鶏よ必今宵は聞てたもんなやそなたが鳴きやると齋世様が延曆寺へお越被成私が頼じや聞てたもんなやト頼む此時本釣鐘鳴る鶴

時を諷ふ松月恠りして鶏を出し「おなたこなたへ走廻り頼めどかい無籠の中ト鶏は籠の上へ乗凄き合方に成〇鳥類と雖聞譯の無鳴ずにいや〜」ト籠押退て振袖に胸の劔羽押包みト鶏一羽抱へ下手の鶴烈敷羽叩をする〇必ず聞て呉りやるなや「小褌ほら〜欠廻る軒端に近き鐘の音と共に啼立鶏の聲ト八ツの本釣鐘鳴松月恠り思入有て〇ヤ、アノ鐘は八ツの鐘コリヤどふしたら能らふなア「おなたこなたと追廻す足もしどろに飛石傳ひト文句に合せ差鐵の鶏を追返し籠を持って伏様として追廻し「只身一ツに詮方無どふと伏て歎しがすつと立て涙を拂ひト早めの合方に成〇夫唐土函谷關とやらの關の戸を開しは鳥の空音我身に辛き齋世の君契り込たる鶏の音をヨモ止めて置ふか「一心こつては目も釣上〇日頃念ずる觀世音守らせ玉〜「伏拜み〜見上見仰し鳥籠留り木爰に追詰追まくられ鶏も毛を立立向へばト床の合方にて色々狂ふ事飛石の上にて廻り又石燈籠の上へ登り見事に廻る「罪も報いも後の世も忘れ果たる戀慕のきつな多の鶏を捨伏蹴殺し報は目前我身の上ト燈籠より下る〇こかれ慕いし齋世の君今宵を稀に逢阪の鳥の寐ぐらを吹風に鳴音を緘る關の杉戸「はぎもあらわに帯引へ馳行向ふへ母覺壽(覺)松月待やト出る(松)日頃こがれし齋世様へ母様でも妹でも構わぬそと退しやんせ「袖摺抜て馳行をか弱き覺壽が引戻しト入替て懷劔にて松月の後より脇腹へ突立る(覺)エ、淺間敷そなたはのふ「夜半の嵐に散花の哀れはかなやトるぐるどろ〜三重にて此道具返し造り物元の中足の道具へ戻る燭臺を照し眞

中に太郎縛れて居る可助角内圍ふて居る友秋相引に懸り兵衛切懸て居宅内留て居る軍藏葉櫻の死骸池の傍に有早枝乳人介抱して居る此外秘水奴大勢並び高張を持扣へて道具納るト(友)宵より寶改んど相待居るに斯騒動に覺壽も不出剩へ太郎は斯の通りサ、返答は何と(宅)何を申も此通りの病兵衛様御一家の申譯をわなれた柄(兵)だまれ下郎二品の寶館に無物を嫁を手に懸云譯と相見へる此上は忤とて疑は掛ん首討て申譯夫仕丁引立參れ(仕丁)太郎お立ちやれト割竹にて叩く(太)アレト問絶する(乳)御病人を早まつて被下升な(宅)其申譯下郎めが池へしづめたる奥様の死骸まつた其野郎を打込しは私でムリ升(兵)宅内うぬが仕業か手討にする直り居らふト刀を抜乳人留て(乳)兵衛様曲者は御前の御家來でムリ升る(兵)覺無わい(乳)覺の無に軍藏の死害とはよふ御存でムリ升な(兵)何軍藏らしい死骸の類附憎いは下郎眞二ツト刀を抜宅内見得能(友)兵衛待(兵)下郎めを(友)宅内とやら是へ(宅)ハツト前へ出刀を取に掛る(兵)うぬト又切ふとする刀を取友秋へ渡す急度見て(友)紛ふ方無雌の御劔友秋遣に請取た(宅)劔は(皆)兵衛様が(友)騒々敷墨附は追て此劔を持參なし能に言上(皆)有難ふ存升るト乳人早枝奥へ這入此内友秋花道際迄行(友)旁々去ばト行(太)待○街りめ待ト呼友秋きつくり又行掛る○友秋と名乘來て二品奪んと爲街り待と申せばマア待(友)何と「聲を掛たる重吉は健忘ならぬ其骨柄友秋案に相違してト繩を切太郎見得(太)愚かや長谷雄雌雄の御劔代々土師の重寶うぬらに渡して能者か此所にて糺明せふ(友)サ夫

は(太)サア(兩人)サアくく(太)夫者共トバタくくにて捕人大勢出る「下知に随ひ下部共手ぐ脚引て打懸るを右往左往に投散しト宜敷立廻り有て(友)宿根太郎が眼力通れく顯たれば隠に及ばぬ如何にも街りだ「位官の形相引換て傍若無人に立はだかりト捕人を投て引拔好の形りに成劔を持って見得より肥前節に成(友)如何にも街りだ此土師の類にさせる恨は無れ共一端手に入此劔うぬに渡ふかト劔を突て江戸見得に成捕人何をト又立廻りト友秋は大ぜりへ消る(太)此上は取込ぬ様四門を堅めト皆々ハツト這入兵衛起上り(兵)太郎が此有様は(太)宿禰太郎は馬鹿ではないわい(兵)何とト太郎墨附を出し(太)親人此品御存か(兵)南無三ト取に掛る兵衛太郎と立廻り有て此時奥にて(覺)そこ一寸も動く舞ぞ「聲を掛て母覺壽一間の内より立出ればト覺壽銀張の壺を持出る(兵)モウ此上は「切て掛るをかい潜り手早く刀奪取て兵衛が右手の脇腹へ柄も通れと突立ればト文句通り有て(太)ヤ、母様には(覺)必驚事勿れ(兵)何科有て此兵衛を(覺)とぼけ舞人で無めが不便や娘が貞女の最期は孝忠義の最期齋世様鳥目の病ひに酉の年酉の月の女性の性血又七ツ目に當る卯の年の女の生膽を用る時は忽平愈葉櫻の最期詮義もせず先此通りト壺を出し○現在肉身の我子の血汐絞り兼たる血の涙産れも同日死るも同日道明寺へ死骸を葬り回向を頼む太郎殿(兵)口惜や工に工し事顯れ此儘死る残念サ時平公へ密事の手紙空敷盾かぬのみならず仕丁に仕込だ偽迎い最早兵衛が運の盡相承の命取らいで置可かト落入る(太)松月殿には御いたわしや

(覺)夫も是非に及ばぬ(太)某も女房を手を持添ての非義非道御異見と思しが作阿房で居た時は血を咄思ひ女房出来した去去今一藥の卯の年の女生(覺)其當人は此覺壽がト腹へ突立る(太)是は何故の(覺)サ、頼置は太郎殿齋世様へ早ふく皆も去ばト引廻し松月の首葉櫻の死骸を見て落入る乳人齋世を連出て(乳)覺壽様の御志血汐を早ふト壺を前へ置(齋)其志忝なし是にて血汐渡し申さんト乳人介抱して吞す齋世悶絶するを又介抱して〇ヤ、今生血を吞と齋敷平念なしたかチニ忝いト悦ぶ侍一人出て申上輝國様御越でムリ升(乳)早く是へ(侍)ハツト遣入(太)何にもせよ實否を糺さん身繕ひする其折柄一間の内に聲高くト太郎花道へ行掛るを(輝)ヤアト太郎輝國是に有暫し(太)何とト振返る奥より輝國着附龍頭巻にて出る太郎戻り(乳)ヤ其元は相丞の警固の役人(輝)不審は斯ト太小入合方にて相丞警固なし明石浦にて難風に逢懸り船の内河内に災有と聞取て返し途中にて偽物の一味を追散し浦道より馳附しト言ふて兵衛に向ひ悪を懲し首を討(太)實に昨日御立の特別れを急げ鳥鐘の聞へぬ里の曉も哉と詠じ玉ひし今ぞ當れる土師の歎き南無阿彌陀佛(輝)齋世君の御行衛を少しも早ふ(太)然らば是より(輝)早行クト宅内下手へ出て(太)乗替引クト内にてハアト馬引出す太郎首桶へ兵衛の首を入持て馬に乗(太)齋世君を詮義附ては父が首延曆寺にて回向頼まんト首桶の蓋取と兵衛の本首仕掛にて出る(兵)不孝の忤めト太郎手早く蓋をする(乳)アノ聲はト馳寄ふとする輝國引廻し(輝)行ク(太)去ばト一聲にて太郎向ふへ輝國

乳人見得能道具返し造り物兩落間一面に川柳をせり上る都て牧方堤の躰にて納る向ふより宅内走り出て(宅)御主人の仰を受曲者を追驅しに行方不知何とした物だナト爰へ仕丁四人出て(〇)兵衛殿の仰を受管家に由縁の奴原は覺期して(四人)腕廻せ(宅)街の盜賊見失しにサア東に成て失たナト是より花やか成立廻りト皆々を上手へ追て遣入兩車雷の音一聲にて向ふより太郎馬乗にて簀笠を纏ひ出て(太)時ならざる雷の光り急ぎ末房卿へ齋世君の御身の上申上んト此時上下一面に松明を照し中通り不殘僞迎ひの人数にて走り出太郎に掛る立廻り乍追込ト道具返し造り物一面に黒幕蘆原兩車雷の音アリヤトにて納るト中通りの仕丁襷八巻にて五人出て蘆原へ隠る、本鶏飛立太郎大わらわ失袂にて劔を出して見得是を左右より仕丁大勢出て懸る見得より鳴物にて大立廻りト皆々下手へ逃込本鐵炮の音して太郎に當るウントのり向ふより友秋黒の四天網の胴丸一本差にて鐵炮を持出て傍へ來り太郎の劔と墨附を取る(友)まんまと取得し此二品忝しト此時左右より仕丁掛るを投退夫と下手へ遣入と道具返し造り物一向ふ御所の筋堀真中門の模様上より糸櫻の釣枝所々に櫻の大樹見事に飭り道具納ると大薩摩に成り「夫臆臆たる春の夜の臆に影も更々と霞棚曳如く也ト鳴物に成孔雀三郎仕丁の形詠への草籠を負ひ仕丁貳人を遣ひせり上り一寸立廻り急度見得大ドロに成櫻の影より焼耐火出る異形の合方に成(孔)ハテ心得ぬ地を裂計りの雷鳴は我素性は紀の名虎が胤成りしが此劔が手に入りしは忝なや我大望成就は近きに有トドロ

く打上ケ劔を腰へ差行掛る下手より輝國出て籠の内より紅梅姫震ひ乍出るを引戻し輝國支へるを闘争の掛りに成詔らへの鳴物に成色々有て宜敷拍子幕孔雀三郎幕外にて鳴物替つて六法にて向ふへ這入跡シヤキリ

同三段目

花柳屋の段

- | | |
|----------|----------|
| 一 堤畑ノ十作 | 一 傾城青柳太夫 |
| 一 奴 宅内 | 一 實は紅梅姫 |
| 一 唐土屋天平 | 一 澤瀉屋 お菊 |
| 一 雷の金兵衛 | 一 同 お兼 |
| 一 料理人喜助 | 一 花舛屋 お律 |
| 一 倉橋丈右衛門 | 一 妹 お道 |
| 一 百姓彦兵衛 | 一 仲居 お藤 |
| 一 同 權兵衛 | 一 仲居 大勢 |
| 一 幫間 仁作 | 一 禿 四人 |
| 一 實は舍人之助 | 一 駕 二人 |
| 一 百姓左四郎 | 一 男 二人 |

一 飛脚 一人

造り物平舞臺向ふ一面壁骨障子門口に大木の柳雪降の躰都て九條出口の柳料理屋の躰仲居四人追羽根をして騒ぎ唄にて幕開く(○)正月じや一寸最そつと遊ぶわいなト又羽根を突奥よりお道仁作出て(道)待て被下升いナ(仁)餘り追ふてお吳被成ナ(□)お道さん又口説かいナ(仁)聞て被下何ぞと云と悋氣ケ間敷(道)イエ〜外の女中を見ると嫌な素振夫じやに依てト互ひに争ふを仲居皆々留て四人は奥へ這入ト向ふよりお律仲居お藤を連て出て來り花道にて捨臺詞有て門口へ來る(仁)お律さんお歸り被成升ト兩人内へ入お道と仁作を見て(律)餘りお前方の中の能のが浦山敷わいな(仁)日頃柄粹なお律さん(律)アノ一間を借程に(藤)志つほりとお咄しを(仁)夫でもどふやら(律)行かまやんせいナトお藤附て三人上手障子家躰へ這入るお律思入有て(律)夫ト孔雀三郎殿は大望の企私も此店で身すぎも軍用の才覺早ふ望が叶へ度物じやト奥へ這入向ふより天平羽織着附にて出て花道にて(天)降たる雪哉今日本の雪見をするとは憂天變の世の中じやト門口へ來てお律呼お律奥より出て(律)おなたは澤瀉屋へお出被成た旦那様(天)門を通る毎にお前を見るがえらい能女房じやと見い〜通て居るわいな(律)何を譯も無事私の様な者降程世界に有わいな(天)チト振てほしいな(律)そふしておなたは能傾城の色様が(天)何の私は上邊の者で商賣は唐物屋一人太夫がムるが得心致し升ぬじや(律)太夫様が嫌ふて(天)金は澤山に有男は能兎角金や男で行ぬじ

ヤトクザ言ふ道出て(導)申お律さん離坐敷のお客がお立じやわいな(律)今行程に先
 へ行て玉いのふ(天)夫なら後に(律)違い無かい(天)ヲ、(律)ドレ見てこふかト這入(天)味
 い物ナ時に分んのは青柳じや何卒索性を糺し度物じやト嫌身にて奥へ這入向ふより十作小
 サキ風呂敷包を背負ひ百姓形りにて跡より百姓彦兵衛權兵衛左四郎京参りの形りにて出る
 (十)權兵衛殿や直在所へ行しやるかいナ(權)是柄伏見へ出て行十作どふさつしやる(十)サ
 最前柄腹が痛ふて成らぬどふしたら能らふト腹の痛む思入三人介抱して駕を言附遣る(權)
 十作今駕が来る程乗て戻たが能(十)大きにお世話でムる○幸い床几が有御無心乍爰貸てお
 吳被成アイタ々々ト痛む思入三人捨臺詞にて向ふへ這入下手より駕屋出て来る(駕)サお乗
 被成升(十)一寸待てお吳腹が痛ふて成らぬト押へ色々思入奥より丈右衛門青柳女形皆々出
 て來り(丈)天平が居らぬで太夫淋敷からふナ(青)置て下さんせ金が有ても好ぬわいな(丈)
 天平の替りに身共を送つて吳舞か(青)藪際迄送ふわいなト皆々下手へ來る十作腹を押へて
 居る傍より(駕)チト能ふムり升哉○お所はどこでムり升コレ申ト言ふても耳へ入らぬ思入
 皆々花道へ掛る十作見詰て居て青柳と入替り上手へ廻り跡より附て行駕昇は申々ど附て居
 るト皆々向ふへ這入是を十作見送乍向ふへ這入此道具返し造り物下手より段々柳上手へ
 廻り能程に堀廻折に成遠見に成ト向ふより以前の青柳皆々出る跡より十作付て出る同敷駕
 昇申々ト言乍附て出る青柳は構ず橋懸りへ這入十作花道中程にて立留り向ふを見る遠見の

間へ子役の青柳の人数出る十作見送る思入ト門の内へ這入十作見へぬ思入後口より(駕)
 申ト大きく言ふ十作思わす駕の中へ尻餅を突をチヨント木頭十作其儘見送るをキザミ宜
 敷幕ト一時に其儘駕を昇上る
 同四段目

島原澤潟屋の段

- | | |
|-----------|----------|
| 一 斑 武 任 | 一 傾城青柳太夫 |
| 一 孔雀 三郎 | 一 實は 紅梅姫 |
| 一 奴 宅内 | 一 同 七浦太夫 |
| 一 堤畑 十作 | 一 娘 お時 |
| 一 判官代辨國 | 一 妹 お菊 |
| 一 雷ノ金兵衛 | 一 母 お兼 |
| 一 實は紀ノ長谷雄 | 一 娘 お道 |
| 一 天平天蘭敬 | 一 仲居 勝の |
| 一 坊主 岩松 | 一 仲居 三人 |
| 一 倉橋丈右衛門 | 一 幫間 三人 |
| 一 若徒 貞助 | 一 悪者 四人 |

一 幫間 仁作
實は佐竹舎人之助

一 道具屋義助
一 古手屋利兵衛

一 捕人 八人
一 飛脚 一人
一 手下
一 子役

四十

造り物後。暖簾上手家躰下手腰の間都て澤瀉屋の躰爰に丈右衛門大盡の形り七浦母兼仲居幫間並居騒ぎにて幕開く(丈)褒美呉れふ(幫)有難山吹有難ふムリ升(丈)時に太夫色能返事はどふじや(七)私は嫌でムんすわいな(丈)然らば身請して國元へ連れて歸る親方を呼べ(七)身請言んせざわつさりと吞まやんせいナト此時下手より岩松乞喰の形りにて出て(岩)お餘り被下ト丈右衛門顔見合○あなたは(丈)岩松で無か(兼)岩松爰へ來い(岩)母者人逢たかつた(兼)逢たかつた(丈)死だ親仁が片意地で勘當まられサ今日柄爰の旦那様じや着物替替て風呂へ行大盡様奥でわつさりと吞直しと(丈)能らふ(兼)太夫も一所に(七)私は(兼)其片意地をト叩き掛るを留て(丈)ハテ能い岩松來い(皆々)ムんせいナト騒ぎにて皆々奥へ遣入引違て仁作幫間の拵にて出て(仁)モウ吞ぬ(兼)と言乍邊り見廻し思入有て○浮世じやナ誰有ふ菅原の身内佐竹舎人之助共有ふ者が賤敷此姿寫れば替る世の中じやナト奥よりお道本を持出て(道)仁作様紅梅様はどこへ行しやんしたナ(仁)お道さん酒機嫌じやナ(道)こなた何用有て爰には(仁)疑ひ深ひお道さん何やら本を持て居てじやナ(道)源氏物語

でムんすわいなナモ疑深い舎人之助様(仁)アコレト邊りへ思入○某が本名知つた柄は生て置れぬ覺期しや(道)手に掛けて被下升(仁)能覺期ト身構る(道)南無阿彌陀佛(仁)身躰見へた(道)エ(仁)疑ひ晴た(道)本間かゑ仁作さん(仁)お道さんト此時天平出て(天)仁作濟んぞ(兼)ト八釜敷言ふ(仁)天平さんどふ被成升た(天)お道は常柄己が惚れて居る青柳の方が附ぬ故其儘にして置たがも道を執もて(仁)じきに應對被成升のふお道さんトわざとお道天平の傍へ寄仁作腹の立思入(仁)サ腹が立て來たぞ(兼)と色々腹の立こなし天平嬉敷思入にて仁作は捨臺詞にて有合ふ品々を打附る兩人争ふ爰へ岩松風呂歸りの躰にて元服して手拭を提何心無出て來る(天)いつそ手短にてト仁作を引付るお道恟りして(道)ア、是舎人之助様をト留る岩松ツカ(兼)と内へ入(岩)舎人之助とは菅原家の餘類我に詮義がト舎人之助を引立ふとするお道留る(天)岩松ぬかるな(岩)合點じやト引立るを振拂ひ兩人を相手に仁作立廻り面白く有てト金盃を取て天平に冠せ(岩)動きヤアがるなト押へる此見得にて道具返し造り物一面の二重上手床の間爰にお福の面香爐盃置真中に十作着附羽織上手に青柳傾城の形り下手に仲居お菊着附前垂花を活て居る獨吟にて道具納る(青)濱の松風通ふらんと琴の調に思はずも(十)是はまたり最前柄浮ぬ顔附氣を浮(兼)と持しやんせいナ(青)鍬鋤持た田返しでもそふ性急には(十)何鋤鍬とは(菊)夫は農作の百姓業(十)何じや百姓じやト恟り下へあり掛るを(青)申どこ(十)百姓と言たじや無か(菊)アヤ物の諺でムリ升

四十一

(十) 悪いたどへじやト二重へ上り(菊) あなたはどこでムリ升る(十) 長崎の唐物町長崎屋長兵衛と己が事じや(菊) テモ笑止所でムリ升(十) 是を見い〜と印籠を出し〇是をお前に遣るは(菊) 粹様じやナアそふして廓のお名わへ(十) 何じや廓の名か車なら淀の川瀬の水車ト車盡を言ふ(菊) アン廓じやわいな(十) 廓とは(菊) 九條の里の揚屋町(十) 辻柄見得る揚屋入ト獨吟に成(菊) 遣手が呷く後口へまやんと差傘(十) 死なご止舞我心ト一寸振有て〇どふじや〜ト袖を扣へる(菊) 放して下さんせ木折で行ぬが戀の道(十) そりや又餘り(菊) あなたは奥へ(十) ホ、果報を知らぬ女なじやナト唄に成下手へ遣入(青) 日頃柄お菊さんの心切忘れは置ぬ嬉敷思ひ升る(菊) ア勿躰無ト邊りを見青柳を上手へ直し〇先々ト下手へ住居〇誰有ふ管家の御息女紅梅姫様共有ふお方が賤敷君傾城餘りと言ばあいたわ敷御家來舍人之助様と妹とはとふ柄トサさすれば私の爲には御主人及ず乍隠し目附夫々能物がト床の間のお福の面を取て〇壬生戻りに買つて來た此面お笑は出來升せん斯ふ言折には幸ひの此三絃引てお目に掛升ふト何成共三絃を曳諷ふ下手より十作隠居風にて出て(十) 面白い〜噂に聞た青柳太夫抱て寐たさに來升た(菊) お年寄のあなたが笑止じやわいな(十) なぜ〜(菊) サ身請にはお金がたんと入升ぞへ(十) 溜て置た隠居金爰に百兩(菊) 夫なら是がト此時内にて御用金の盜賊待と大きく言ふ(十) 何じやト胸り(菊) アリヤ物真似じやわいなホ、トト十作案心の思入(十) サ太夫返事が聞度ト言ふ青柳顔を背ける〇其濟ぬ顔附(青) アン壬生に有

桶取の(菊) 大盡ならぬ御隠居様(青) 嫌がる物を無理遣りに(菊) 實念佛の早鉦を(十) 朝夕樂む手活の花ト傍へ行をお菊引退(菊) 花盗人の不用心ト又十作お菊を退(十) イヤ目盲の川渡りトお菊又支へ(青) 百萬夕顔叶ぬ事(十) 夫は地獄のお詞か(菊) ハテ面を直す(三人) 大念佛ト壬生の鳴物の頭を打青柳は香爐お菊は面十作は日傘を持三人桶取の身振宜敷有て唄に成「三國」のサツサ富士山玉椿の八千代迄もと契りしに「差める意地のサツサ男女欺れて退ハチがよふいなん」去とはつらやサツサさながらたらちねの恨も深きふくれ顔ト三人踊り止(十) 縁無衆生は渡し難しじやナト下手へ遣入(菊) モシ今の人にお近附かえ(青) とんど知らぬわいなア(兩人) ナホ、ト又茶道具屋の拵にて出て(十) 御用が有とはあなた方でムリ升かへト三人顔見合(菊) お前さんは(十) 私はお出入の香具屋是が水指香箱茶入(菊) 注文した事はムんせぬ(十) 御入用なら差上升ふト香箱を無理に渡す(菊) 是は餘所へ御出被成のでムリ升ふ(十) お前様に上升柄太夫様を取持て被下升せ(菊) 外へお持被成升(十) どうぞ貰ふて(菊) イエ〜夫は押戻す爰へ古手屋道具屋岩松の三人出て(古) 盗人め(道) 己が着物道具迄爰に有(古) 金も爰に有(道) のぶとい奴め(古) 連れて行く〜ト打のめす(菊) 此お方どふしやさんす大事のお客じやわいな(岩) ヤア我が搦袂じや丁管してこます(古) 時に奥へ往て暑爛で(道) 夫が能〜ト三人拾臺詞にて遣入青柳お菊に言付十作の着物着替させ十作青柳と顔見合相方に成(青) 何國のお方か知らぬ共私の事は是切思切て下さんせと立上る裾を押へ

(十)ア、申そりや胴欲でムリ升一通りお聞被成て被下升〇ト是より難波近在の者也しが京見物の折青柳を見初既に盗迄せしを救われしが思込たる太夫故得心して吳と言ふお菊は奥に居る在所娘の事を思ひ成程と言ふ思入(菊)是は叶て上ずは成升舞(十)叶て被下升か(菊)命に替ても取持升る(十)有難ふムリ升(菊)奥の四疊半へ寐間引て(青)夫ならお菊能かや(菊)早ふ(青)お客是にトお菊差圖して青柳奥へ遣入(菊)今の内早ふ(十)どれへ參じ升(菊)奥の間へ(十)夫ならこつそり(菊)時分には私が一寸(十)モシ差合はト宜敷思入〇御無用でムリ升ト此道具返し造り物真中二間の數寄屋上手廊下續き前庭の心雪持にて都て奥坐敷の躰雪おろしにて納るト下手より天平丈右衛門お兼出て(丈)時に天關敬毎日毎夜の遊興も時平公の御内意請菅家の餘類を詮義の役(天)某も日の本に足を止め紅梅姫を時平公へ差上んと思ふ折柄合點の行ぬ青柳太夫ト三人言合有て忍び遣入跡獨吟に成「夜を籠て鳥の空寐を忍び出忍び思ふや稻荷山何れ浮世と薄紅葉ト雪散々降る橋懸りより十作頼冠りにて忍出上手家躰よりお菊手燭を持青柳の手を引出て正面の屏風の内へ入る十作恥敷思入にて切戸の方へ行「逢坂の鳥の空音か偽りの賊と啞と眞實はトお菊思入有て(菊)モウ見へそふな物ヲ、辛氣(十)參て居升るトお菊十作の手を取内へ入る「心の底を打解て〇今は嬉敷明の鐘(菊)サアくちやつとト行燈の火を消す兩人捨臺詞にてトト十作を屏風の内へ入(菊)是も何ぞの因縁か知らんと上手へ遣入此内天平伺ひ出て屏風の様子を見下手へ隠れる十作出て

來る上手より青柳出て伺居る十作顔見合せ(十)ヤお前は(青)堪忍して被下升ト障子立切(十)儘に今のはト思案して〇ム、ト屏風を取中よりお時在所娘にて出顔を隠し居る〇ヤコリヤどふだ吹替を喰したナ百姓じやとて餘りじや〇エ、腹の立おのれ待ておれト上手へ行掛る(時)待て下さんせト取附を振拂ふとする宜敷有てトヤお時はお菊を頼十作が傾城に心奪れしを咄し言號せしを嫌ふ故無理に迎に來たと言ふ臺詞十作聞入ず無理に振切行ふとするお菊出て三人揉合ふ(菊)誰ぞ來て下さんせト呼立る宅内舍人之助先に手燭を持走り出て(宅)待つしやれく(舍)氣を静めたが能ト宅内十作の顔を見て(宅)ヤこなたは(十)そふ言ふお前は(宅)十作か(十)宅内か面目無く(宅)イヤサ弟そなたはのふト合方に成り〇元土師のお家は親の代柄大恩請た御主筋こなたは内で百姓業覺壽様にもお果被成菅家の御家もお取上御臺始め若様姫君散々よも青柳様を紅梅様と知つての事じやムる舞の(菊)知らぬ事ならせふ事もムんす舞(舍)若知てなら許置れぬ(宅)返事はどふぞヤト三人詰掛て言ふ十作恟り後悔の思入(十)ア、知らなんだく何と云譯致し升ふ〇後悔の臺詞有て〇元私が親共は堤畑の十左衛門と申河内代々の百姓田地畑もムリ升たが金の方に取られ年貢の不納を郡領様に救われ其頃姫は三歳親共は死行鋤鋤取て田畑の仕事ト去年京見物の折青柳を見染し事を言ふモン御主の御身へ不義仕掛しを悔て面目無くト詫入(宅)是十作心改め忠義の二字を忘れさつしやるな(十)思ひ出も勿躰無(菊)お時さん嬉敷ムんせふ(時)願叶ふもお前

のお影有難ふムんす(菊)可愛がつて上さんせ(十)何柄何迄有難ふムり升(時)是と言もお菊様の影(菊)是で双方納るとはこんな目出度事は無(舍)此上は主へ忠義いつ迄も(十)何の忘れ升ふ(宅)夫で落附た農作が肝心夫お時さんも一所に(十)モウお暇(宅)早ふいなんせ(十)ヲ、合點〇お時さんお出〜と隔地に成橋懸り(遣入(菊)不難に事が納たわいのふ(舍)何柄何迄お前のお世話(宅)お禮申さじや成らぬ(菊)何阿房ら敷ト此時天平出て(天)聞た〜青柳と言は紅梅姫能事を聞たわいと岩松も出て(岩)幫間の仁作は佐竹舍人之助(天)時平公へ連て行て褒美にする(菊)兄様お前も(岩)訴入して出世するのじや(菊)そうはさ〜ぬわいな(宅)悪事のかどふ人(岩)面倒な注進する(天)合點だト行ふとする宅内引戻し岩松は舍人之助と立廻りお菊支へ上手より勝の走り出て(勝)一大事でムんす丈右衛門と言ふ侍がお姫様の御身の上時平公へ裏道柄引立て行升たト橋懸り(遣入(宅)南無三姫君を(舍)ちつ共早ふ(宅)合點じやト行掛る(天)うぬをやつてはト舍人之助支へる舍人之助夫どりと敷下手へ遣入天平岩松宅内お菊引戻し揉合ふ(天)夫ト橋懸り(遣入(宅)うぬ何國迄もト追欠遣入(岩)いま〜敷トお菊を振切朱宮帯にて叩き掛るお菊と面白き立廻りにて道具返し造り物一面黒幕蔽疊踊地にて納るト向ふより駕を纏にて縛り跡より丈右衛門附出て(丈)太義〜時平公へ差出しなば褒美は望次第ちつ共早ふ(四人)合點だト此時橋懸りより舍人之助走り出て(舍)遣る事成らぬ戻し居ふト圍て急度成る(丈)うぬは幫間そこ退ケ(舍)此駕の

内は青柳太夫(丈)夫疊で仕舞(四人)合點だト立廻り丈衛門切て掛るを當て四人は上手へ廻て遣入舍人之助追掛遣入跡本釣鐘向ふより若徒良助旅形提灯を持出て花道にて(良)今打しは九ツ片時も早ふ勝の様にそふじや〜ト舞臺へ來掛る勝の走り出て駕を見附(勝)儘に姫君忝いト悦ぶ(良)左言は勝の様(勝)何勝野とは〇ヤ良助では無か(良)替た所で(兩人)逢升たナ(良)若君様の御在所知れ升てムり升か(勝)菅秀齋様の御行衛知れしとナ(良)其儀に附て金子の才覺(勝)用意して居升わいな(良)お供仕り升ふト舍人之助出て(舍)其方は良助か(良)舍人之助様の此躰は(舍)委細は退て良助諸共ト先河内へ(勝)合點でムんすト駕昇へ活を入(舍)河内迄此儘急げ(良)シテ此駕の内に(勝)姫君紅梅様(良)姫君となト悪者伺出て(悪)うぬト掛る良助突廻して(舍)跡構ずと片時も早ふ(良)然らば直様(勝)舍人之助様ト駕に附勝の良助向ふへ遣入丈右衛門心附覺悟と切て掛る舍人之助兩人を相手に立廻り悪者を見事に切下(丈)コリヤたまらぬと返に掛るを引す〜見得チヨ〜淺黄幕振冠せる捕物太鼓に成り橋懸りより代官先に捕人大勢附添出て(代)能承れ孔雀三郎御劔を奪取此邊に隠れ住由擷取て差上る不覺を取な(皆)心得升たト上手へ遣入チヨント淺黄幕切て落す造り物一面の二重蹴込山の書割此真中に猪の小家後口山幕花道際に捨井戸正面西山の書割真中に輝國着附好の形斑武任着流し大小尻からげにて袋入の劔を取合此見得宜敷雲氣の合方雪おろしにて道具納る(輝)ハテ怪敷ヤナ(兩人)いぶかしヤナ(輝)夫雌雄の劔合躰爲時は必奇瑞有

と聞(武)今降雪は穢れを拂ふ劔の威徳(輝)察する處雄の劔此山中に隠し有か(武)何にもせよ目の前に(輝)奇代の不思議を(兩人)見る物じやよナト合方納る(輝)其劔をト手を掛取ふとする一寸立廻り能程に猪の小屋より孔雀三郎エイト聲して差鐵の矢飛輝國片手に引摺わみざと當りし躰にウントこける一時に三郎大百日好の形手に獵矢と半弓を持岩臺に掛り(武)ヤ孔雀三郎様(孔)リコヤト符の合方○珍敷や武任俄に一味の心を見込劔取得し其方が働き出來す(武)お請取被下ト劔を差出す(孔)太儀(ト責の頭を打込(武)アノ物音はト向ふを見込(孔)扱はム、(武)御油斷有な三郎様(孔)そちは是よりト叫き○急げ(武)ハツト一聲にて向ふ(遣入(孔)勇し、若者じやよナト思入有て花道の方へ行輝國起上り呼子を吹左右より捕人大勢出て伺ひ附行三郎舞臺へ戻る双方顔見合急度身構へ是より突廻し立廻り有てト、輝國を井戸へ蹴込捕人三郎を取巻御上意と圍む又早切の立廻りに成皆々を切伏井戸の内より輝國エイト聲掛綴り鎌を投出す三郎手早く取輝國出て立廻り有て三郎は花道へ退れ行くを(輝)曲者ト聲を掛(孔)エイト礫を打兩人引張宜敷拍子幕

同五段目

柄塚の段

- 一 武部 源藏
- 一 左中辨希世

一 姫 勝野

- 一 葱の 九助
- 一 八なしの笈六
- 一 若徒 良助
- 一 鱧の 兵太
- 一 其外百姓惣出

造り物一面の高二重草土手稻村所々に菜種の花都て柄塚の躰上手より子役三人三十石の船頭にて東へ舟を引躰大井川の鳴物にて幕明くと皆々東へ遣入向ふより姫勝の抱帯旅形にて出て跡より良助若徒形り三度笠大小脚絆提灯を持出る(勝)夜の明るに間も有舞わいのふ(良)今のは借七ツ(勝)夜道と言者ははか行ぬ物じやナア○夫に附ても御主人の行衛姫君様をお尋申御無事を聞たさ(良)御臺若君紅梅様を尋ね出し逢せ申升る故大丈夫に思召升せ(勝)とんだ事をしたわいのふ(良)いか被成升たナ(勝)お守を花活へ入て置たわいな(良)夫は捨ては置れぬ取て参り升ふ暫く此稻村にてお待被下升せ(勝)爰柄牧方迄は(良)暫へお待懸下升(勝)夫なら良助(良)右の品は宜敷ムり升かト首に掛し財布を出し(勝)大事に掛て居るわいな(良)ドリヤ行て参らふかト下手へ遣入又舟頭西より出て捨臺詞にて東へ綱を引出て東へ遣入(勝)良助の戻る迄此稻村で待合そふと後口へ遣入ト元の合方にて雲介の二人希世を駕に乗せ出て(兵)爰であるせ(笈)能磨るわるだ(兵)申親方(と起す希世

黒羽二重古の差抜の破れしをはき冠り下地にて頼冠りして(希)何じや(兵)極の所迄來
 升た(希)誰が極たト是より錢は無と言ふト(三人)争ひ雲介は打て掛る希世廻り稻村の中
 へ遣入雲介兩人は下手へ尋ね遣入る稻村より勝の逃て出るを希世追出て(希)嫉勝の能待て
 居て吳た(勝)申希世さん私が爰に居るも咄せば永い事其助はモウ戻て吳ぬかいナ(希)そふ
 してこなたはどふして爰に(勝)サ菅家の御一族は散々にて難波に少しの知邊有て都を出升
 たのでムリ升(希)我一人とは有難いト口説く臺詞有て勝野は嫌がり逃廻るを取ら(希)源
 藏の在家定めて知て居らふ(勝)源藏殿を尋て何と被成升(希)菅秀才が詮議するのじや(勝)
 エ、(希)源藏が住家へ案内せい(勝)ハ存知升ぬ(希)ぬかさじや斯ふしてト勝の懐中へ手
 を入れる財布手に當るを引出し(希)コリヤ金(勝)夫をト納る(希)其金おれに貸て吳(勝)め
 つそふな事ト逃るを引附ト勝のを當て財布を取(希)味い(天)の與(忝)ト頂て此時諸
 方より百姓大勢棒鋤を持出て(○)うさんな盗人(□)畑荒しはこいつじや(△)叩きのめせ
 れたか(笑)何でも爰らにト又百姓出て(○)こいつも同類じやト兩人を引立上手へ遣入る其
 助急ぎ走り出て勝の爪突(其)誰だ(勝)其助か(其)勝の様(勝)おそかつたわいのふト
 言掛る又百姓大勢わや(出)て入亂れ皆々上手へ遣入る六ツの鐘鳴る雪の合方に成犬の聲
 する向ふより源藏肩入れやつし錢三度笠にて手にふごを持出る(源)時世とは言乍菅家普代

の武部が家筋若氣の誤り勘氣の身の上も先非を悔む其内に冤の御流罪御臺若君是以捨置れ
 ズ又紅梅様の御行衛は女房戸浪が兄の藏人とやら守護なすどの事菅秀齋様の事は鶴の目鷹
 の目此中柄の痲瘡御不自由をさせ升舞と毎夜の盗み人知れず此畑(思)へば非人に等敷ト傍
 りを見廻し○劍の盜賊詮議も何も彼も若君御全快の上ト鶏の聲烏啼○そふじやト邊り
 の青菜木瓜を取てふごへ入る左右方より百姓大勢出て源藏を捕へに掛る源藏ふごを捨上手
 へ逃て遣入早太鼓に成皆々入釜敷聲する希世冠り下地も捌け紅だらけに成片手に財布を握
 り草臥し跡にて出右のふごに爪突又入釜敷聲する故逃廻りトふごの中へ財布を隠し畑の
 鳥おどしの籠笠を着爰へ百姓大勢出るト希世此中へ交り(希)畑荒しはあつちへ行たト
 敵へる百姓心附ずあちこちとしてト(○)最前の盗人めじやト見出されあわて花道へ逃る
 皆々追欠て遣入葱の九助百姓にてふごを下竹の先に鮑貝を附ケ馬ふんを拾乍出る源藏出て
 己のふごを取行合頼冠りして九助上手へ遣入る源藏小隠をしてそつと出る此時希世ふごを
 探し乍出て上手より九助又出る希世附廻し此内源藏花道へ行三度笠を落す希世九助を捕へ
 (希)此ふごじやト大聲でいふ源藏花道へいたる希世はふごを取九助夫と寄る双方宜敷木の
 頭源藏は向へ走り遣入九助は前を押へる希世はふごを敬々敷頂く此仕組宜敷キザミにて幕
 同六段目

長柄村源藏内の場

日に六ヶ敷ト言ふ故恠り(順)時にあすから見舞升ぬぞト立上る(戸)有難ふムリ升る(順)そんなら御内儀隣りへ見舞ふて來様かと唄に成下家へ遣入る向ふより庄屋午頭兵衛五三郎紅木綿の頭巾足袋着附抱瘡の拵らへにて手を引出て(庄)五三よモウ向ふじや負て遣らふか(五)イユ〜何共無(庄)サ、來い〜ト舞臺へ來て○サ爰じや源藏師は目が覺升たかのト内へ遣入是迄に子役白木の三寶へ茶碗を乗て戸浪一々手を附給仕して居る庄屋の聲を聞きし升たな(子)伯父機能御出被成升たト手を遣る(庄)コリヤ挨拶せぬかト宜敷有此内向ふより源藏頰冠り手にふごを持走り出てそつと遣入子役二人見て(子)アレ強いわいナト皆々恠り源藏吐息つき(戸)旦那じや無か(庄)御亭主じや(源)お庄屋機能ムリ升たトふごをそつと門口の脇へ置き(庄)一躰どふさつしやれた(源)ハイ只今途中にて狐附に出合升てな(庄)ハ、ア(源)足に任せて欠て戻り升た(戸)夫りや女子の狐でムリ升ふ(庄)女子の狐じやト戸浪格氣の臺詞有て有合ふ人形を投る(源)庄屋機もムるに面目も無若様の手前○イヤサ何を申か不埒者め(庄)マア互ひに言たり言れたりじや子が無故じや○ハ、ハ、是ハ龜相立派な御子息が有のに御免〜○どの様に隠しても玉籠の内で育たと菰簾で誕生とは似ても似附かぬモシ詮議か但又お命にかゝわる様な時の御身替り(源)何とト庄屋氣を替外の事に偽らし○爰の門の松の木去年の春廿五日の夜一夜の内に植たが村中の大評判隣の素太夫

が足も立ぬに松へ膳や線香を上げ間も無素太夫は死悴の藤太が戻りこなたが三十兩に松を買夫柄便りを聞なんだがどふ成り升た(源)サ三十兩に買契約は成升ても何を申すものふ女房(戸)私とても大切に勤居升た御主人のお庭に御秘藏の松主人は御流罪と成不思議にもアノ松一夜の内には是へ参り升て柄の心遣ひ(源)夫故大切に仕るも此故でムリ升(庄)ハ、ア奇妙〜一夜の内に水海と成駿河の富士の孝靈年そこで百人一首にも松飛しかば今歸らふトハ思へ共連が有て面白想に遊んで居る遊して置て被下ト立上る(源)マ御咄し被成升せ(戸)是坊よ爺様はお歸りじやがお遊なれば何成と被成升やト子役兩人下りて來て(五)爺様モウ行つしやれト袖を引(庄)三ツ四ツの子の様に跡追ふのか阿房め○言聞した事忘れたかトにらむ(五)ありや源様と遊ひ升すト庄屋門口柄(庄)御亭主〜ト呼ぶ(源)ハイ〜(庄)心に染ぬ友達で氣に入らぬ子なりや連て居に升まんざら私も土ほぜり乍世界の恩義をト觸書を出し○八幡村柄支配する庄屋の書狀觸書夫讀で見いト投込(源)急ぎ觸書にて知せ候今日大臣家の御雜掌此方代官始拙者御召にて御仰被渡候趣左に印下書にて知せ候○一菅相丞一族儀急々吟味有之候に付近在近國迄大内にて御吟味被成候故一子菅秀齋事八幡村に住居候趣相聞へ候故明日人別調急々申來る可候月日八幡領役人中え京家判ト讀恠りして(戸)嚴敷吟味をト庄屋内へ入(庄)サ、そこじや○源藏殿こなさん一昨年四月春迄は八幡にムッて手習の師匠此村へ引越た事こなたを高飛さすなど仲間への心得大事の役目じやわいの○こ

なたが子じや〜と言ふて育て居た其子吞込ぬ正敷相丞様の御血脈菅秀齋様(源)ア、是ト
 戸浪子役を抱き源藏は午頭兵衛を引退門口にて急度見得一時に合方に成思入有て(源) 皆
 は菅家の族を根を絶さん時平が心近國迄も追人とな(庄)夫じやに依て手前の倅幸い仕上た
 此胞瘡生顔と死顔は相合の替る者と根堀葉堀の吟味なれば源藏が一子となし居る事知らい
 で成ふか元此長柄村は天武の頃より川筋成ば淀川桂川を始め三方四方の水筋延喜二年に菅
 家の御支配相丞様より御救ひ金下し玉はり堤の續き田畑の地となし長柄村と迄なし被下し
 御影私が親共兼々の物語りいづぞは御恩を報ぜんと思ふ折柄流罪の悪名エ、嫌々敷○源藏
 殿見憎からふが此倅御役に立て被下升ト汗を拭乍言ふ源藏戸浪愁の思入(源)ア、哀れ君
 の御治世と相變りなば百官百仕の其一人豈我々の及んや一合の御扶持人と申でも無御身様
 に助け貰ふも御運の強サ戸浪(戸)ハイ(源)御禮〜(戸)ハイト子役に辭義をさせる○若君
 様志し厚き午頭兵衛様に御禮の御詞下し玉り升ふト此内源藏門口を見張て居て(子)世に
 無我を過分の心萬足なり父上譏者の爲に罪せられ一時も早ふ相果て御先祖様や母様に御目
 に掛つて源藏夫婦そちの事申上て恩賞貰て遣り度死度わいヤイト聞て戸浪泣落す源藏喰縛
 り庄屋は大聲上て五三を抱(庄)勿躰無〜コリヤ倅我は果報者じや菅家の若君様が今の
 お詞有難い事其菅秀齋様の何で己れが競べ者に成物ぞ然もこと附御頼申た今度の身替りト
 是を聞表より(源)ア、コレト明て白眼○向ふ〜參るは地主の情者隣りの藤太が参り升るト

内へ這入(庄)若様も倅も浦の物置に疊を敷て合點か(戸)本に用意仕升ふわいな(源)早ふ
 〳ト子役兩人を連納戸へ這入藤太悪者の拵へにて出て(藤)是々御内儀〜ト無性に叩く
 (戸)今明升〜(藤)明い〜ト叩く源藏門口を明る(源)お隣の藤太様サア爰へ(藤)源藏
 我は義理を知て居るかよ去年表に有アノ松が三十兩に賣て呉と言ふて代金は今日の明日の
 と内義が留守遣ふたりおれが無理か〜ト大きく言ふ庄屋煙草吞で居て(源)重々御尤三十兩
 の金子も断申上ても(藤)置けいヤイ全舛此土地は菅原の領分で有たが相丞が謀反を工んだ
 事が願われ島流しと成今では三好清貫様の御領分じや併三好様柄言附つたは時平公のお捌
 能か金おこさんか無かコリヤト指にて源藏の顔を突く此内庄屋の天窓へ煙草の吸柄を明る
 藤太是を知らず○金が出来ずば家明じやサア出て失ふト天窓を撫廻して焼どせし思入○ど
 いつじやてんがふひろいだうぬ○ヲ、誰じやと思升たらち庄屋様此中は御無沙汰○ヲ、あ
 つやの(庄)一寸御目に掛り度(藤)ハイ(庄)そこを〜(藤)何でムひ升(庄)菅原の御領分
 が三好清貫様が大内へ預り故如何様にも致せよとの御内意はこなた計り聞届て役目を勤る
 代官庄屋へは仰の無はどふした物で有ふ(藤)エ、(庄)サ御領分預る支配もする役人共の村
 内に事有た時にはこなた出て捌き召るか召る心ならば當代官様へ申合せ役目退役仕り升ふ
 かと立上る(藤)ア、申午頭兵衛様〜今咥付升たのじやハ、〜申〜ち庄屋様御免被下
 升源公執成〜(源)御庄屋様が御申被成ても何の〜情深い御庄屋様金子の借が有ても入

譯をあなたへ申升ると夫は今年が明年に成ても待てやろふと仰やるお情深い午頭兵衛様
 (藤)結構なお情じやのふ(源)夫故村中でも人が立て升る(藤)ヲ、立る(源)アノ松の地
 代の金もマア(源)暫く(藤)ヨシ(源)待てお遣り被成と(藤)成程(源)何卒地代も明年迄
 (藤)チイ(源)お待被成て被下升せ(藤)チイ(源)置きマアがれト心附(源)地代の金を
 おこす舞と志やがるそんなちよぼ市は無は(源)又庄屋様も庄屋様じやあれがこいつおどしに
 掛て出鱈目を其様に常平常談義して庄屋代官は此藤太が随分叮嚀に行届して有ぞよ御上へ
 苦勞の掛らぬ様に仕れとは八年以前此村へ改て京都柄お觸流しの有た事ツイニこなたの内
 へ祝儀日柄した事は有る源藏には何で肩を持って己を困らすのじや源藏地代の金せふか庄屋
 殿源藏己が無理かよもや無理では有舞がの(庄)無理じや(源)庄屋の内不幸か有てもなせ
 に悔や葬禮には貴様一人は立なんだ(藤)何葬禮誰がこなたの所で死だ(庄)悴が死だ(藤)
 エ、(源)めつそふも無(庄)是はしたり夫ナト吞込す(源)夫己れが子の五三めが葬禮に今朝早
 々村中が送つて來れたにこなた一人り人もおこさず悔も言ず禮義は叮嚀じや念の立たる藤
 太杯と一本己れをかたげさせた貴様じや(源)八年跡親に勘當受人別は扱て有るに戻て來る柄
 村中で喧嘩見ぬ顔していりや附上り今庄屋に向て何と言さまじやま一度いふて見よト是を
 聞藤太詰り段々と志よげる(源)貴様勘當はいつ免された當在所には置れぬ是柄人別帳を持て
 お代官で調て來やうかと立上る(藤)申お庄屋様御免被成(庄)イヤ聞ん(源)マア(源)お

待被下升お前が悪いト源藏庄屋をなだめ(藤)己が悪いト是より午頭兵衛源藏の金を猶
 免して遣れと言ふ餘義無得心する向ふより百姓二人出て(源)こなたは藤太を引立てムれ
 (源)又こなたは源藏を引立ち庄屋を尋ねるト言乍舞臺へ來て(源)は下家へ遣入門口にて(源)
 源藏殿(源)と内へ入(源)お庄屋様爰にか(源)申何だ處じやなひ方々尋て居り升たト此内
 (源)は出て婆は餘程大病じやと言乍向ふへ遣入(源)サ代官様柄人が來て早ふこなた様をおこせ
 じやト是より春藤玄番が來て源藏詮議有故引立て早ふ來いと云ふ臺詞有て此内源藏午頭兵
 衛に叫き納戸へ遣入(源)出て藤太を引立様と言ふ(藤)何で行のじや(源)證據が有貴様毎夜
 畑をあらしたに依てト、是非無行事に成源藏衣裳着替出て(庄)サ行升ふト履物を見る此
 時戸浪膳を持出る藤太履物を探す此時五三郎が履て來た花緒の赤き草履を取上て門口にて
 (藤)此草履は己が大坂で買庄屋の悴に見舞に遣た草履今死だとの詞夫なら爰の内へアノ子
 は(源)ハ、アコリヤまさかの時はト言掛る(庄)ハ、くさめト大きく紛らす(藤)合點の行ぬ
 ト引返し遣入らふとするを源藏突廻し門口(源)サ参り升ふト唄に成百姓先へ庄屋藤太源
 藏思入有て花道へ遣入戸浪膳部を持乍(戸)京家柄源藏殿へ咎と言ふて來たが疑ひも無若君
 様の御身の上庄屋のアノ子を變りとは思へば能々因果な菅家の御家せま敷物は宮仕へじや
 ナ(源)此御前部表の松様へお備申升ふト膳を持出て松に備(源)ドリヤ若様にもこちらの御膳を
 上様かト獨吟にて奥へ入「雲に欠橋霞に千鳥及び無とて惚舞者かト向ふより希世口暮の形

りにて出て(希)ア、ひだるし、牧方柄夜通し走り歩行てつた上へ、りア、喰度、泣落し〇四百四十文の夜喰より木賃は一寸共無わひヤイ「賤が伏家の月を見よヨイヤサ、ト唄にて門口へ来て伺ふ〇爰が源藏が内管秀齋の實否を糺し度けれど夕べ勝野めに逢ふて金を取たと思ひ詰ふと入たが馬のふんア、ひだるや、ト邊りを見松に備へ有膳を見〇ハテ嬉敷やト運氣の合方〇今空腹の折柄アレ、ひだるい口を見る事じやよナアト色々あかしみ有て暫時に喰て仕舞寐轉び鼻唄を謳ふ向ふより笠見藏人笠を持出て續て九助出て(九)申お侍源藏の内は向ふじや(藏)恭ふる拙者は京地の者でムるが昨夜當村の庄屋午頭兵衛殿とやらんが下り船にて乗合同道致し最前尋ねしに何か取込の様子(九)そふじや野荒しで京家の詮議嚴敷故源藏も大勢に言れていた此笠はその隣の藤太が當じやけれど段々言たが己に先へ内へ行て來れと言ふ柄來たのじやお侍お別れ申(藏)源藏を詮議致し居るトナ(九)チイのふお別れ申そふト花道へ抜行藏人門口にて(藏)お願申升(戸)どなたでムり升ト兩人顔見合せ〇ヤそなたはナ(藏)姉者人戸浪様か(戸)チ、藏人か(藏)姉者人(戸)ヲモ思掛なひ(藏)兄弟の名乗合(兩人)是はまたり(戸)よふ來て下さんした(藏)早速乍承り度は源藏殿代官より御召との事何事の詮議か有躰に御咄し被成(戸)去ば三好清貫玄蕃諸共代官方へ(藏)源藏殿を無理無躰に手込になし(戸)若君の御身の上(藏)シテ若君ハ(戸)是に御安泰(藏)忝なひ玄蕃清貫亂妨なさは源藏殿に(戸)心元無夫の身の上(藏)委敷事は立歸

り姉者人(戸)弟早ふ(藏)シテ來いなト唄に成藏人向ふへ走り入希世見て居て(戸)藏人が來やつたら一寸は氣が丈夫に成た様な(希)御上使(戸)エ、恠り希世内へ入〇ヤ希世様(希)罷通る〇戸浪打絶て逢ぬ時に源藏は(戸)今用が有て(希)ま見へ度物じや(戸)希世様あな御追放じやムり升ぬか(希)師匠の御罪で淺間敷姿と成三十一文字の讀歌にへればこそ腹はひだるく虫の聲黄な粉小豆の餅もほし幾戸浪二三日喰せて貫度(戸)サ此頃疱瘡子で(希)今日尋て來たは同氣相求ると言物茶粥でも(戸)主が戻た其上で(希)過分シテ飯櫃の有所は何國(戸)チ、さもし(希)チ、ひだるト唄に成希世奥へ遣入ふとするを戸浪留て手を持納戸へ連れて遣入唄「笠の下より濕る、雨の空に知られぬ憂思ひと向ふよりお曾根簀笠にて躰を隠し出て兩方の内を伺ひ松の影へ身を隠すと道具返し

造り物西へ引松の木真中にて道具留る東の方藁家根正面巖壁納戸口佛段上手に屏風引廻し此處にお路母の足をさすり居る九助藤太煙草吞で居る合方にて道具留る(九)思ひ掛のふ早かつた(藤)庄屋が源藏の最負さらすが胸が悪い我が此笠で野荒しの届ク我も我じや畑位のを盗む物かい(九)夫に今朝此村で年の頃廿二三の女御所めいた風俗若黨が一人附て其咄しでは此長柄堤で五十兩の金財布取られた故御上へ届ると京の方へ急ぎ歸り腐つたモシ其五十兩も(藤)何ぬかす夕べは平が處でシテ遣られた〇去ど己の内の名前が印て有此笠といつが着て失た知らぬト笠を見る(路)是兄よ其笠隣の伯父さんにふと貸てやつたよ(藤)

ム、(九)藤太こいつはだまつて居られ無(藤)ヲ、能は己に任せて置まだ隣で最前庄屋めが子悴死だと云た儘に隣の源藏が子じやとぬかしてけつかるが菅秀才に違ひ無は又庄屋の悴をまさかの時の身替りと忠義立して死だと云觸(九)夫で分た(藤)九助よ是柄此事を番様とやらに念たらしめて置(九)合點だ代官へ行て庄屋のがきが死だ事まつた野荒し夕べの金の事迄立番と三好様へお届申て褒美は分取(藤)ハテ百も承知じや(九)夫なら藤太ト淨瑠璃に成「目を縫飛す放し鳥九助はどつかト急き行ト花道へ一散に走り遣入(藤)妹よ此笠とふむは隣へ貸たと云へよ(路)貸た柄貸たと云ふ(藤)出来すわい好きな物買てやらふぞ(母)お路必ず非道な者に貰やんな(藤)エ、病人が(母)切無乍も云にや成らぬ「よろばい」遣出て夫トの戒名藤太がびん先丁々ト位牌を持って打(藤)何さらすのじや娑婆ふさげ〇妹よ藥か湯一杯汲てやれ(路)合點じやト茶を汲〇必手こねて呉なよ「むく附に云ふ顔つく」〇と見てト此内藏人出て伺ふ(母)極道めが女房でも持て親の介抱するならば其方に斯迄苦勞はさぬに百日と限る此病ひ今日は則死る日數の百日目今日を限りと親子の別れ親にさからふ不孝の悴己が此跡取と云ばト銀の壺を出し〇お傷敷や覺壽様三人のお娘子紅梅様は玉の輿因果なは松月様と葉櫻様の血汐共に御自身も此内に込有りし一首の歌梅は飛櫻は枯るゝ世の中の何とて松はつれなかるらんと忠義に死る覺悟をば己が様な子を持しは兩親に不孝にしたる報ひにて死際迄も天道の見せしめ玉ふか悲敷ナア「今端の際に子に咄す昔を洗ふ

洗濯の祖父は此世を死出の山咄しの種と残す也(路)あつかア冷る是を冠つてト綿を着せる〇誤れと云たじや無か(藤)八ヶ間敷何を咄す母者が死だら己を賣て金取て遣る心だは此老ぼれの息の根止てやろ妹退け(路)嫌だ(藤)どけ「すつと立寄を納戸柄ト納戸より藏人出て藤太と立廻つて捻上ぐる(藤)アイタ々々宵覗きか盗人めか名を名乗れ(藏)盗人に不有笠見藏人(路)あつかア聞たか(藏)何をト立廻り見得能しく留り(母)藏人殿とは心得ぬ(藤)何を(藏)委敷咄は申さん伯母者人で有たよなト道具返し造り物元の源藏の内へ引戻す爰に百姓大勢竹鎗を持出てエイヤア々々トバタトにて門口を遣入戸浪皆々をなだめ(戸)子細も不咄是は何事とふいふ譯でムんす(〇)譯も無覺への有事じや(〇)爰の源藏が畑荒しト立騒ぐ輿より希世出て(希)待たト〇百姓共マテト静まれ扣へ長袖の身なれば構わぬト(〇)打のめせ叩き擲れ(皆)擲きなぐれト又立掛る希世恟り逃込む向ふより百姓作藏出て(作)今爰へ春藤立番様始め代官南兵衛様又庄屋も源藏も御出じや静まりて居い「斯る折柄春藤立番首改の其役は科有我身と今日の役豫てぞ連れし兼氏を網乗物に同道し直なる武邊を取巻たりト向ふより庄屋腰をかゝめ立番龍神卷にて其跡部屋四人弓矢にて源藏を取巻其跡に網乗物一丁兵助代官南兵衛九助願書拵て附て出る取巻四人動くな(庄)是が則武邊がわばら家(九)最前よりお願の藤太の事を(代)暫く待て(立)源藏庄屋只今代官にて清貫公の仰ヨモ偽りも言れ舞サ庄屋を初め代官案内しやれ「案内致せと皆引連れて打通る女

房取附せぐり上ケト宜敷通り乗物は松の蔭に並ひ戸浪は源藏に取附(戸)待兼たこちの人
 前がち代官へ行しやんした其跡でナち庄屋様のお子がナア(源)コリヤ(玄)源藏能聞ケ相丞
 異國の天蘭敬と大日本を履し好文木に準へ辻放下の業を鍛練し娘紅梅を五十九代の後胤齋
 世君へ押附行方不知道實は筑紫の國へ流し者わりや忠義を立て菅秀才をかばい置し白狀し
 て危い命を助りおれコナ大馬鹿めト源藏手を組目を絨居しが(源)御上意の趣逐一承知菅公
 御忘記念の菅秀才人知れず此源藏が(庄戸)エ、(源)イヤちかくまい申上しに相違ムり升
 ん(戸)夫りやち前(庄)鳥魯絶て(戸)何をマア(源)是女房所詮叶わぬアノお子の○アノ子の
 ナ○人手に掛て憂身を見るより只一打と思ひ切ナサ思ひ切去乍ト吞込せ○菅秀才をすつ張
 とナ○打奉るでムり升ふ「思ひ切てぞ申覺ト戸浪うつ向居る庄屋源藏を見詰居る隣より藤
 太出て(藤)是九助とふじやち代官もそふ言ふたか(九)庄屋初メち代官も(藤)取上さつしや
 れぬか(九)チイ(藤)其等じやが何卒私と此九助が申事に御聞被下升(代)先程より九助が度
 々の願なれど源藏菅秀才をかくまひ置たる事白狀致さぬ故事明白に申せし上は願ひの趣聞
 濟し吳ふ何事ヲ申上い(藤)有難ふムり升るト隣よりち路鉢巻して片肌脱泣乍走り出て(路)
 兄よちつかい息引取故サ来い(藤)エ、わい時に只今(路)夫だ柄不孝者だ早ふ戻れト藤
 太の横頬を張(藤)うぬどふさらすト竹鎗を取(路)サア行ケ(路)トむ性に附退兩人隣り(遣
 入(九)藤太が弱りやがつたト希世出て(希)一別以來玄蕃源藏とふじやナ(玄)ヤ其許は(源)

希世様(希)菅秀才が實否を糺し時平公へ夫を功に(皆)夫りや閑者もどきじヤト此時藤太鉢
 巻して(藤)そこへ坊さんが來たら去ては色々の世話じや嫌々敷へ、へ、裸は御免被下升せ
 時に私の處の妹めが爰の内の源藏に跡の月畑仕事に參る笠とふことを貸て遣り升たが夫柄
 どんと其後は返し升せぬ其笠を着てナ九助(九)そうじや(路)ト是より畑荒しも女の旅人の
 金を取たも源藏じやと言ふ爰へち路よきを提走り出て(路)ち寺柄坊さんが尋て來た今來い
 ヤイ(藤)先へ行ケ(路)又動かぬかトよきにて擲る争ひ乍ト遣入(源)コリヤ女房(戸)
 何でムんす(源)外でも無最前柄庄屋殿の顔色が悪い戸浪同道去やれ(庄)己がどこに(源)奥
 へムつてとつくりと暇乞○イヤサ暇乞と言ふ様な○夫程仰山な病でも有舞ナ女房(戸)成程
 病にお負被成升な(庄)辻占の悪い隣りの吊(源)其隣の最早老病(戸)お年に不足も無替り
 (庄)こつちは未だ今年で丁度ト愁の思入(源)ア、是(庄)六十路に足らぬ骸(戸)弱らぬ内の
 御養生(源)サちやつと御案内(庄)暫く御待下さり升ふト辭義する「言はず語らず子の別れ一
 間へ泣に入に息(希)何玄蕃又見ればあれに網乗物(玄)アノ乗物は當麻左衛門(源)ム、(九)
 ち代官隣の藤太も不便な物でムり升る婆は死る借た金は源藏が踏さらすしコリヤ何哉迷惑
 には被成升せ○源藏とふじや松の地代藤太が己に頼んで置たサアやらぬか○毎度(路)畑を
 荒し其證據儘に見て置たト源藏を突廻しふごを提出て○コリヤ此ふごト腰に附て有笠を取
 出し○此笠じやふごにも笠にも此通長柄村素太夫と印て有は隣で借たはうぬが悪心(玄)源

藏時刻が移る返答致せ(九)地代の金は(代)清貫公にもお待兼若君出すか(五)返答せぬか
 (代)首を渡すか(九)ふごは奇妙じや(皆)扱ふ金は○サア(一)何と詰寄る源藏手を組目
 を緘居る(五)返答無ば者共(皆)動くな(皆)ヤ(一)捕人四人掛る立廻つて取て投る百性大
 勢竹鎗にて掛る九助源藏羽がい責にする代官ふごにて請なす瓜を投る口幕の金財布出る九
 助夫と寄る源藏金を取る立廻り宜敷御工夫有て源藏竹鎗を引たつくり百性不殘花道際に留
 るト九助代官又掛るを百性不殘九助代官へたる源藏竹鎗を構へ急度見得(源)盜賊夜盜たり
 共主人の爲には少も厭はず片端柄死出の道連無法者といわばいゑイア一統に(百皆)ヲ、
 (源)然ば暫時の御猶免事を延し被下ば此身も安のん御返答が請玉はり度(代)役義を背く故
 故召捕んとせし某を何で手込に仕る(源)命を元の金の宿免百姓衆へ御利解被下ト駕の内よ
 り當麻左衛門(當)今宵一命の無武邊源藏命は惜き物じやナ(源)何と(當)納戸を開け(家來)
 ハ、「納戸を開いて立出る武運に家も當麻兼氏手金の儘に立出てト文句の通りにて當麻百
 日の着附にて出て(源)左衛門様(當)武邊源藏サ、是へ(一)源藏本舞臺へ来て○代官姑め
 是へ(一)ト皆々本舞臺へ来て(希)一別以來じやが其許も主人を冠つた故の其手錠何棒力者
 の家柄でも其手金ハはづされ舞(當)是は左中辨科人も今日の役菅秀才見知る者一人も無由
 雌雄の劔は時平公の情にて草を別て詮義なせ共不知故腹十文字にと存せし所時平公菅秀才
 の首見分なば又三ヶ年劔の詮義致し吳んどの御詞イザ立蕃殿(五)ドレ「懐中より取出す海

老鏡明て云れぬ互ひの胸如何と武邊は身拵息を詰て控へたりト手金を明ク○家來大小「仰
 に夫と大小もト宜敷上手へ通り源藏思入有て(當)百姓共の扱ひ(源)夫五十兩ト投出し(代)
 此金は(源)野荒しの扱五十兩言分有舞(代)思掛無五十兩(百皆)金を別升ふムれ(一)ト下
 手へ遣入(五)源藏菅秀才が首打て兼氏殿へ(源)承知仕る○女房若君を早く是へ(戸)畏り升
 た「稜の上着に引替て見るもいぶせき御姿ト戸浪手を取出る(戸)若君様御詞下し置れ升ふ
 (五)太儀々々ト此内源藏入替て(五)ハ、相丞が一子菅秀才ト引寄る戸浪源藏に刀を渡す○
 當麻氏偽か賊か見分られよ「忍の鏝元屈ろぎて實と言ば助んど片圖をト九助子役の頭巾を
 上て見る源藏九助を返し(當)賊に菅家の若君又目印の有事故お請合申せし今日の役目生顔
 と死顔と違も有ん○女料紙を是へト顔を見る○ハテ何を猶豫「權威の詞に手習の机を夫と
 押出す硯の海の南無々々と胸に戸浪の打思ひ(當)源藏早くト源藏當麻に目を附居て○同道
 しゃれ(源)ハット隣の一錠の合方に成り源藏子役の手を引前へ出て戸浪息を詰附て出る
 (當)好文木に準へ菅家の筆の廣むる道實幼けれ共相丞が御胤只一筆にト懷紙を差出し机へ
 乗○サ是へ一筆書せて見やれ(源)若君の御手跡を(戸)此場にて(當)ためす其跡で(五)首
 は立蕃が持歸る(希)切役は此希世ト子役をつかまへに掛るを突退け白眼つ源藏足首を掴む
 ○アイタ、ハ、トへたる○己れ慮外者め(源)身の程知らぬ爵當り打殺しても大事無のじや
 (希)大事無とは(源)若君を何で手込めに(希)や(源)サ此源藏が誤りか(希)御尤(五)早く書

せて返答(三人)致せ(戸)モシ此子が爰で(源)如何にも○若君何成とト子役もじくする
 (希)源藏何じや己が筆の持寫し提灯筆は受取れぬ「邪魔するも構はず一の字認させ」一
 字を書き(源)イザ御覽被下べし」と差出す(當)通れ遣は菅家の(源)ハ、(當)コナ偽り者めが
 (源)何と(當)夫源藏夫婦取巻(家)動くなト掛るを立廻り千鳥に投て爰へ藤太出掛り居て
 (立)そちや手向ひ致か身共が手を下して(源)此若君を贖物とは(藤)如何にも替玉じや油断
 は被成升なま只今本跡御覽に入升ふ「奥を差て突立藤太やらじと支ゆる武邊が一心代官九
 助取ては投透を伺ひ欠入藤太續いて行んとする所を檢使の兩人脇挟みト宜敷文句通有て○
 「暫し詞も無内に若君小脇に脇挟み(藤)是が正眞の紛ひ無菅秀才じや(戸)ヤ若君を(源)南
 無三(藤)夫源藏を「右往左往に大勢が支る内に無慘にも若君の首打落すハツト女房悶絶に
 氣拔の如く黙念たり静々首をひんだかゝト當麻立蕃源藏を挟み藤太子役を表へ連出て松の
 傍で後向にて(藤)エイト首打源藏へたる戸浪ウントのける外皆々宜敷御摺換有べしト、藤
 太子役の首を提(藤)是はのサト骸を松の影へ投○誠の菅秀才の首此小倅は庄屋の子に違ひ
 ムり升ぬ松の代を踏れた替り御褒美申上する(立)通れ出来した褒美は代官跡より(代)
 心得升た(立)イザ御同道(當)役義相濟上は某迎も元の科人(立)實檢首尾能相濟ば(當)貴殿
 の執成(立)推擧は胸に(當)立蕃殿(立)兼氏殿(當)乗打御免「乗物間近く立寄て○主人の爲
 には我子を殺し其忠儀天道も感じ玉ひ力と成て矢張身變りト氣を替○藤太の働き正眞紛れ

の無菅秀才の此首討て時平公にも御満足源藏も無本意を失ひつらん○藤太顔を上イ(藤)へ
 イ(當)能討たト思入有て○去らば「と乗移る(立)源藏の身の上清貫公へ申上る迄張番致
 せ(代)畏てムり升る(立)ヤイ源藏菅秀才は殺され相丞は流され喰や喰ずの辛抱も種が消た
 ぞ辻々で大字を書一錢二錢の合力受やせ枯た類を見よ(代)見られた様じや(立)供せい
 「首桶たつさる春藤を蕃ゆふ」として出て行ト立蕃代官九助希世附て乗物昇せ向ふへ還
 入藤太花道へツカ〜と行見込を本釣鐘を打込み松の影より菅根首の無子を懐に抱き縛
 り泣隣りの内より婆銀の壺を持出て跡にお路附て納戸より庄屋出三方顔見合始終物言ずひ
 ゐきの狂言也源藏目を絨兩手を組藤太は傍へ行袖を引(源)うぬ「物をも言ず切附る切られ
 乍に言譯と言ふも耳へも藏人庄屋も命に替ト源藏藤太を散々切「忠義の刃先折柄左中辨來
 掛るわつと其儘逃込希世戸浪も供に夫トの裾(戸)ヤこちの入庄屋様始め兄様か(藏)源藏
 (庄)心を静めて(戸)待て下さんせト立廻りにて藤太を切希世出て天窓の片びん切る切られ
 乍納戸へ逃込むト、源藏藤太に股がり刀を振上る此時松の影より菅秀才の手を引出る藏人
 源藏に見せる(源)ヤあなたは若君御安泰にて「あきれ果たる計り也(源戸)是はどふじやト
 恠り藏人奮置を出し(藏)老母が呉々も(庄)此遺言と狀を開き源藏急度見(源)梅は飛櫻は枯
 る世の中に(藏)何とて松はつれなかるらん(藤)女房悦べトむつと起き○倅はも役に立たわ
 り(曾)アイ、ト泣落す「聞よりわつと聲を上前後不覺に成に身ト懷中より死骸を出し抱

べ(源)如何しても合點參らぬ此源藏サ、仰聞られ被下升ふ(藏)御尤姉者人に巡合代官へ欠
 附評定を立聞し姉上に語る其内に隣の物騒敷不斗名乗合たるも盡ぬ奇縁老女と言ふは拙者
 が爲に眞實の伯母者人でゐるわいの(庄)悴に暇乞の奥での涙京家の役人に此藏人殿が裏柄
 お越にて委敷聞た藤太の腹編いけずならずと思ふた藤太(戸)是はしたしふ朝夕共同じ内成
 念頃にも藤太さんに女房さんの有事は存升ぬ○お子が出来たは御實子かど言ふ譯でムん
 す、「問れて猶もせき上」(曾)お恥敷乍私が身の上且は又悪黨な男をば今日迄菅家の
 若君様のお役に立し藤吉が死骸を出し○因果と聞て一遍の「回向を唱へて私が身を聞て哀
 れを添てたべ○思へば今年で七年此子を産みし藤太殿は便りにならず産せて貰た八阪の内
 は算用書にせり立られて詮方附モウ淵川へ身を沈め心引れて死にも死なれず責て此子を助
 置ふと思ふた梅の木元捨る所を置くも菅相丞様御目に掛つて御理解請又其上にお金を玉
 はる高代のお情今日迄無事に三人が全ふしたは菅家のお慈悲其若君のお役に立しは孝行者
 本間の本ほんの「人といわれて死でたべ○夫が則親御へ孝行」譬へ十年二十年不孝の
 月日を送つても大の一字が附わいな○此悲敷さを見せるのが遠柄忍んで松の後聲も得立ず
 思ひ泣若君様を此松の内へ押込で○藤吉を懐から無理に出すのもどたんの間無慘や首を親
 の手で「打を見て居る母親が心はどの様に○悪たれ者の種と成ちどなしの子が出来たるぞ
 「口説立」人目も恥ず差合も目も當られぬ風情也源藏悲歎の涙を拭ひト宜敷有て(源)サ

ハ不知して藤太様一圖に主人の敵き也と思ひ語たる恨の刃「刀逆手に取直す人々あわて止
 てたもト源藏腹を切らふとする庄屋止る戸浪取附を下へ敷藤太よろめき乍留(藤)源藏殿犬
 死さする餓鬼を棒にふらすか(源)何と(藤)今こなたが腹切て菅秀才は誰が請取養育して菅
 家を引起す忠義の人が有にもせよ島にゐる相丞へど云譯をせふと思わるゝ○女房ア、己
 が苦敷故だまつて居る間に男の根さらへ思ば己程悪徒は無不孝はすれど孝行せずど云ふ
 因果で此様に善心な氣に成たやら己が心で己が氣が○代官柄欠附て居てこいつ目に常柄我
 菅家の恩義大事は爰じやあ庄屋頼み升又女房コリヤ子は死ぬる男にや放れ男が有内柄後家
 が立ぬは我も又若い故男持深切な男を○如才は有舞勝手にせい南無妙法蓮華經「哀れにも
 又お笑止けれ(源)實に誤たり」藤太の忠義の二字を忘れたり再び菅家の引起し齋世様紅
 梅様の御目の妙薬イア源藏が引受て覺壽様の御詠哥女房旅銀の支度を篤々若君様御用意々
 々「思掛無納戸より(希)ハアツト泣く(庄)今の一件(藏)生ては置ぬ(皆々)覺期せい(希)待
 て被下覺期を極た死にもせよ扱々けすのけらの荒藤太さん今の善心は人間の誠菅家の恩
 義を請たる者が皆善人の其中で師匠共主人共希代の爲には恩の有菅家に敵對おつむりをか
 も瓜西瓜を見様に源藏に切賣にしられ痛いト鉢巻を取仕掛にて割れる○此様此姿○源藏様
 藏人様當村のお庄屋様菅秀才様に御執成何れも様天窓で金丁致升ふ「左中辨舌さはやかに
 善の心に成たるも不思議なれ(源)通れ」此上は藏人殿一先築紫へ荒増(藏)何様若君御無

事をお知らせ申(戸)恩を請たる忠臣義心も告てたべ(庄)私も此村を捨て悴を改て此藤太殿の養子に遣り名を替てお曾根殿の樂(曾)お情請て夫トの菩提(戸)若君様御詞を(曾)我に變りし藤吉へ此松手向てゑさせよト松の枝をお曾根に渡す「時に不思議や表の松枝も若葉も一時に枯木と成ぞいぶかし鳥ト薄ドロにて表の松打返し赤く成る(庄)ハテ心得ぬ松の葉の一時に枯しは(曾)いぶかしやなア(源)君にも此枝御持参有て今行先は播州の(希)曾根村に此儘に(藏)お曾根は菩提の役目の松(源)名號て是を曾根の松(庄)相丞様の御歸路有るか(戸)無かの其ためし(路)御植被成る御家の爲(戸)菩提の爲や(藏)天下の爲(路)人の爲(曾)世界の爲(源)主人の爲に苦めと己れト向ふを見込○此爲々は時平おとト是よりノリに急度成て○いろは書子のあへ無も散ぬる命の無慘さよ此の世を誰か捨置ん「ならむるかしき若君をうゐの奥山身を隠し○今の時平が御位は「あさき夢見し如く也○永いく榮へる曾根の松時節を京の都にて菅家の榮へ與へる大自在「自由に見せんと直真に千里も延る武邊が義心ト源藏見得(戸)御運も強く若君の御命長柄に有し故(庄)産れ故郷の曾根村へ(曾)孝行に死せし幼子は(路)露の涙をかゝさんの死だ其跡又兄が(希)此世を荒した荒藤太(藏)片見の笠見藏人は(希)兎にも角にも希世の中の(戸)義利と(曾)恩との(庄)筆法に(源)書傳へたる(曾)折手本「一字千金菅原の筆の大入繁昌と榮や塚や惣座中當りの程こそトお曾根五三郎を負ち路のの手を引午頭兵衛藤太の死骸に取附戸浪は銀の壺と笠を持源藏は跡に松を

持て此段切源藏手早く押入より箱を出し頂き内より一卷肌に附る九助伺出て(九)さふはさゝぬト花道へ行を源藏刀を抜突附るお曾根死で居る藤太を引起し(庄)コレト見せる皆々花道よりハ、アト源藏九助を切る首かふくにて能所へ出る「吉字成るト段切宜敷幕

明治廿八年二月十五日印刷
明治廿八年二月十八日發行

(定價金八錢)

版權興行所有

著者相續者
兼發行者

著作者故並木五瓶男

並木善次郎

芝區三田豐岡町六十一番地

印刷者

山本鏌次郎

京橋區西紺屋町廿六七番地
秀英舎々員

印刷所

株式會社 秀英舎
京橋區西紺屋町廿六七番地

